



(1) 新庄遺跡遠景（東から）



(2) 3区掘立柱建物跡 S B 5303（上が東）

3.新庄遺跡第5次発掘調査報告

1. はじめに

新庄遺跡の発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

新庄遺跡は、京都府南丹市八木町室橋に所在する集落遺跡である。周辺には池上遺跡をはじめ、野条遺跡・室橋遺跡・諸畑遺跡など弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しており、南丹市域でもとくに遺跡の密集する地域として知られる。

当遺跡は府営ほ場整備事業に伴い、平成10年度から平成18年度にかけて計4次にわたって八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)による試掘調査が行われ、その結果、古墳～奈良時代・中世にかけての遺構・遺物が確認されている^(注1)。

今回の調査は、ほ場整備事業に伴うものであり、調査か所については、工事によって遺構面まで掘削が及ぶ範囲を調査対象とし、さらにこれまでの試掘調査の成果を踏まえながら南丹市教育委員会および京都府教育委員会の指導のもとに調査区を設定した。なお、今回の調査次数は、南丹市教育委員会との調整により第5次調査とした。

現地調査は、平成20年5月9日～同年9月12日まで実施した。調査面積は2,270㎡(4地区)である。発掘調査は当調査研究センター調査第2課課長肥後弘幸、調査第2課調査第2係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同専門調査員竹井治雄、同調査員高野陽子が担当した。なお、調査が終盤を迎えた8月30日(土)には現地説明会を開催した。

調査期間中は、南丹市教育委員会・京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して感謝したい^(注2)。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

2. 周辺の遺跡(第1図)

新庄遺跡は、亀岡盆地の最北端に近い地域に位置する。亀岡盆地は中央部を大堰川(桂川)が貫流し、当遺跡はその東岸に位置する。遺跡の東方には丹波山地が屏風のように立ちはだかる。周辺には筏森山(標高295m)や多国山(標高191m)などの山塊が点在し、亀岡盆地と切り離された小盆地状を呈している。

周辺の室橋遺跡からは縄文時代の石鏃が出土しており、縄文時代には早くも人々の生活の場となっていたことを窺わせるが、土器等の遺物や明確な遺構については未検出である。続く弥生時代には、池上遺跡から弥生時代中期の住居跡や墓地が検出されており、大規模な集落遺跡が広が

っていたことが明らかになった。同後期の集落跡としては、野条遺跡や諸畑遺跡が知られている。さらに諸畑遺跡や室橋遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての住居跡が検出されており、この時期にも大規模な集落が営まれていることが明らかになった。詳しい調査は行われていないが、池上遺跡を眼下に望む筏森山の南部の尾根上には、古墳時代後期の群集墳が分布しており、周辺集落の人々の奥津城であろうと思われる。

今回調査対象となった新庄遺跡の南方約5kmの屋賀・池尻周辺は、承安4(1174)年に成立した後白河院法華堂領の吉富荘絵図の写しである「丹波国吉富庄絵図写」に「国八疋」という国衙に関する地名が記されており、丹波国府の有力な候補地である。池尻遺跡や室橋遺跡では、近年の



第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000殿田・亀岡)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|----------|------------|
| 1. 新庄遺跡 | 2. 新庄城跡 | 3. 室橋遺跡 | 4. 野条遺跡 | 5. 船枝遺跡 |
| 6. 清谷古墳群 | 7. 畑中城跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 |
| 11. 野条城跡 | 12. 筏森山古墳群 | 13. 城谷口古墳群 | 14. 池上遺跡 | 15. 池上古里遺跡 |
| 16. 多国山古墳群 | | | | |

調査で奈良時代の大型掘立柱建物跡や墨書土器が見つかっており、周辺に何らかの公的施設が存在する可能性がある。

新庄遺跡周辺には、新庄用水を開削したと伝える高雄神護寺の僧文覚上人(1139～1203年)に由来する文覚池や用水の見水場とする文覚堂(室橋堂)など、文覚の名を冠した灌漑施設が多く残されている。新庄遺跡南方の野条遺跡や室橋遺跡では、古くは弥生時代から古墳時代に遡る大規模な溝や奈良～平安時代にかけての大小の溝群が検出されている。これまでのところ文覚上人が開削したとされる用水に直接結びつく溝等は確認されていないが、当地域一帯で検出される溝群は、亀岡盆地北端部における治水や水田開発の歴史を知る上に重要な資料である。

当遺跡の北側には、船井郡の郡名を冠する船井神社が祭られており、延喜式神名帳に載る船井郡十座の内の船井神社に比定されている。もともとは現在の場所から約300m西北の大堰川河畔に鎮座していたとされ、旧社地には塚が残る。

神社の北側には「舟枝」の地名があり、「船井(舟居)」ともども大堰川の水運(舟運)に由来する地名と考えられている。^(注3)

3. 調査概要

(1) 調査の概要

今回の新庄遺跡第5次調査では、調査対象地に4か所の調査区を設けて発掘調査を実施した(第2図)。各調査地区は調査順に1～4区と呼称する。それぞれの地区の調査面積は、1区が840㎡、2区が270㎡、3区が760㎡、4区が400㎡で、4地区をあわせた調査面積の合計は2,270㎡である。調査以前の土地利用状況は、1・3区は水田、2区は畑地・果樹栽培地として利用されていた。4区は以前水田であったが、土砂置き場に使用されていた。

調査にあたっては、まず重機により耕作土を除去し、その後、人力により遺構の検出と精査作業を行った。検出した遺構については、遺構の種類を2桁のアルファベット、それ以下、今回調査次数の「5」、地区名「1～4」、検出番号「01～99」の順に4桁の数字で表記した。また、建物跡や住居跡に伴う柱穴はP、土坑はKと略記する。なお、調査地の地区割りや実測・空撮図化等に際しては、世界測地系座標を用いた。

(2) 基本層序(第3・4図)

調査地の標高は、122～123m前後を測る。調査地全体の地形は、北東側がやや高く南西に向かって低くなるが、おおむね平坦面を呈する。

1～3区では、深さ15～20cm程の耕作土・床土直下に明黄褐色ないし黄褐色粘質土の広がりが見られ、遺構はこの層の上面から主に検出された。このように遺構検出面までは比較的浅く、遺構の残存状態から後世の開墾等により大きく削平を受けていることが判明した。4区は調査前には土砂置き場として利用されていた。北側では旧水田耕作土の下層が遺構検出面である明黄褐色粘質土(地山)になるが、南側に行くに従って上面に暗褐色粘質土が堆積しており、遺構はこの層の上面で検出された。地形的に4区は南側からのびる丘陵の裾部に近い位置にあたり、南側に

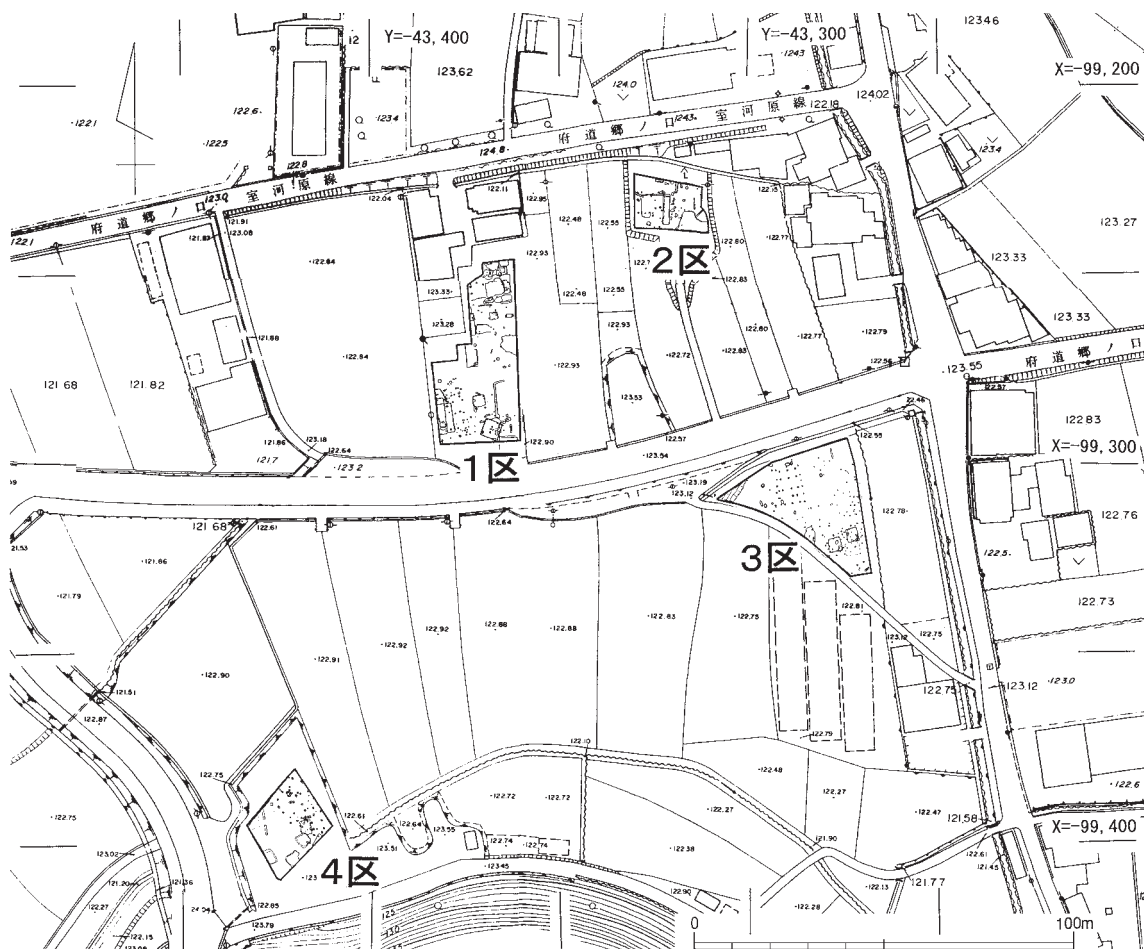
行くに従って高くなるものと想定されたが、土層の堆積状況からみて4区と丘陵の間には谷状の地形が存在するものと想定される。

(3) 検出遺構

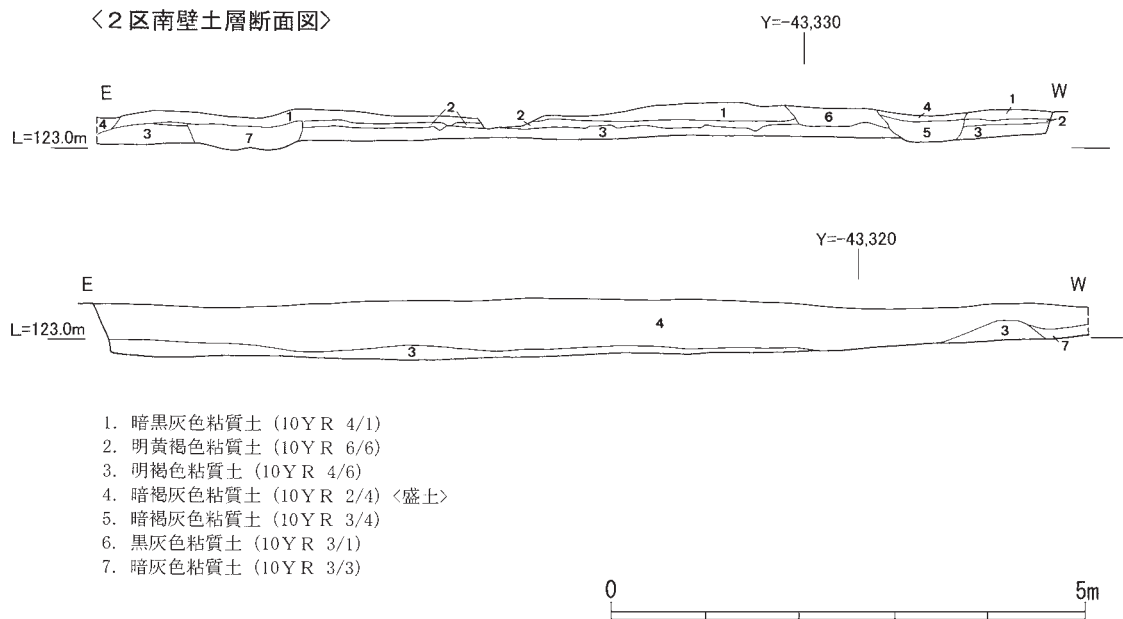
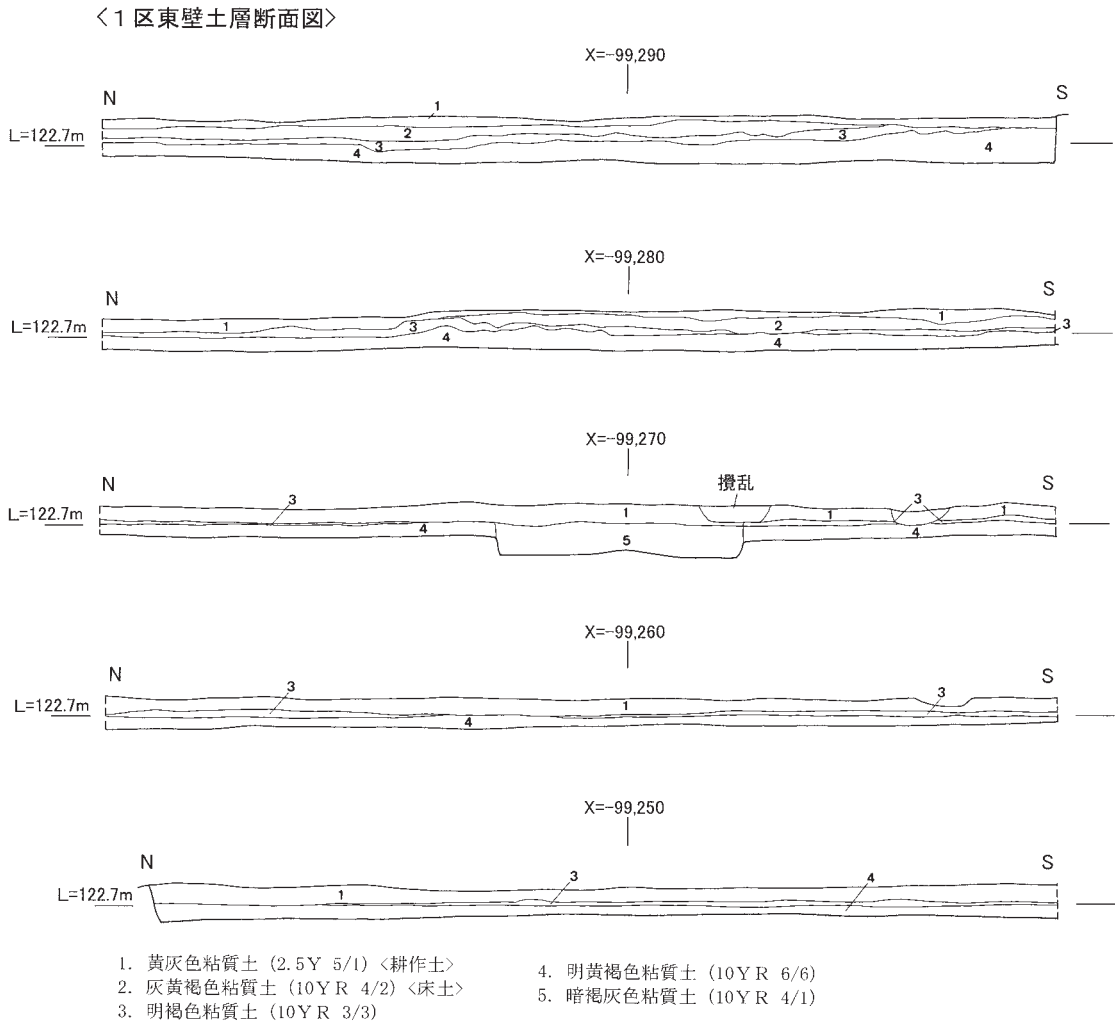
今回の調査では、古墳時代前期から中世の遺構を検出した。以下、各調査区検出遺構の概略を記す。

1) 1区(第5図) 1区の主な検出遺構としては、竪穴式住居跡1基と土坑群・集石遺構がある。調査区の北側では、以前この地で操業されていた瓦製造に関連する粘土を採掘したと思われる近世の大小土坑群を検出した。これらの土坑では、瓦片や廃材を大量に投棄したものがみられた。

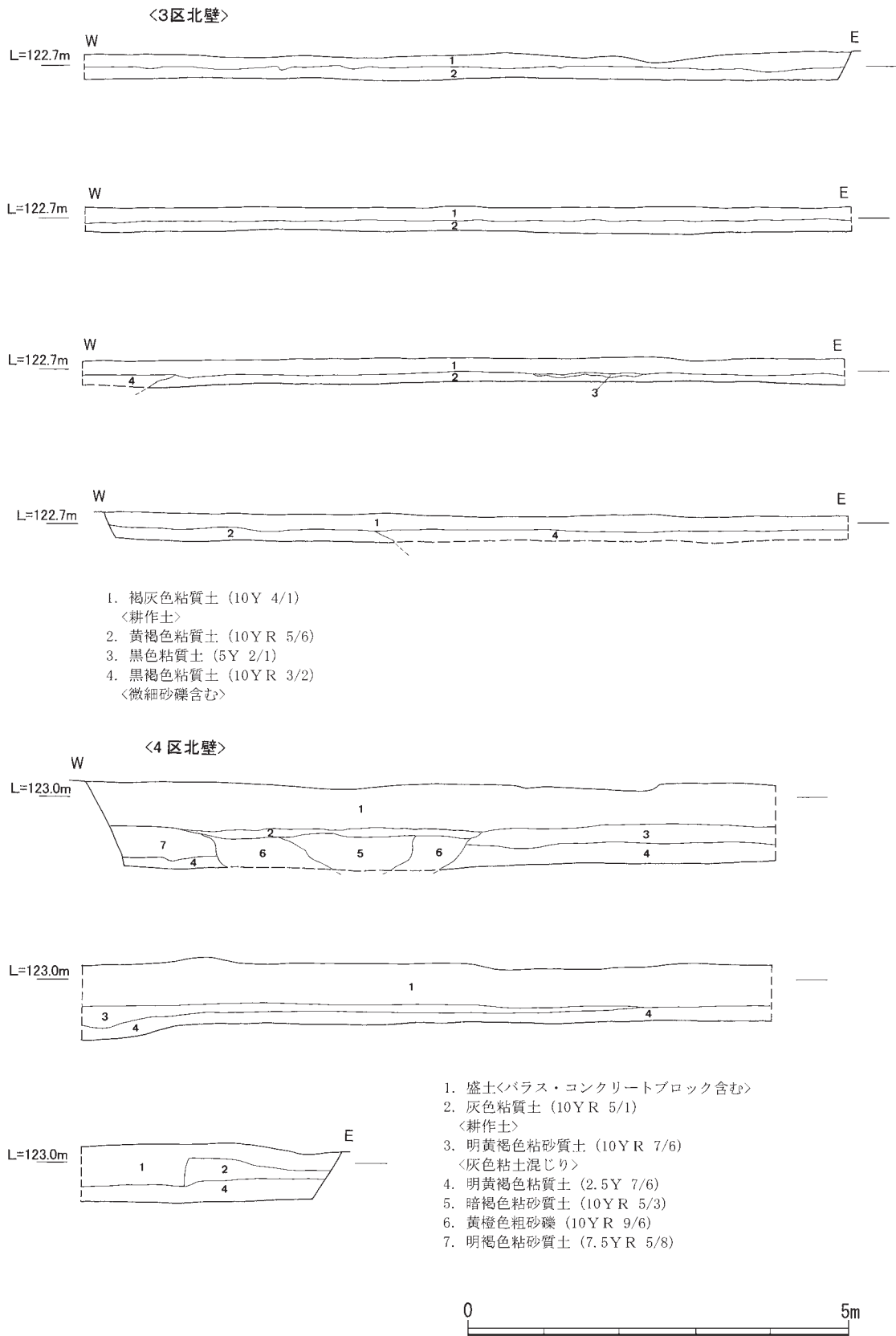
竪穴式住居跡 S H5177 (第6図) 1区の南端部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居の北側辺には集石遺構 S X5158が重なる。床土直下から検出され全体的に削平を受けている。住居跡の規模は、4.3m×4.3mの方形で、残存部の深さは0.1mを測る。住居跡の主軸は、N10°Eである。床面上で主柱穴の検出作業を行ったが、通常見られる床面の四隅では確認することが出来なかった。住居跡中央から炉跡と見られる焼土坑と、これを挟んで南北方向に2対の円形ピットを検出した。炉跡は径約40cm、深さ30cmを測る不整形な平面形を呈する。炉跡の周辺の床面には薄い焼土の広がりが見られた。周壁溝が住居壁に沿って掘られており、幅約10cm、深さは8cmを測る。このほか住居跡の南西角から隅円方形の土坑K1を検出した。長辺80cm、短辺52cmを測



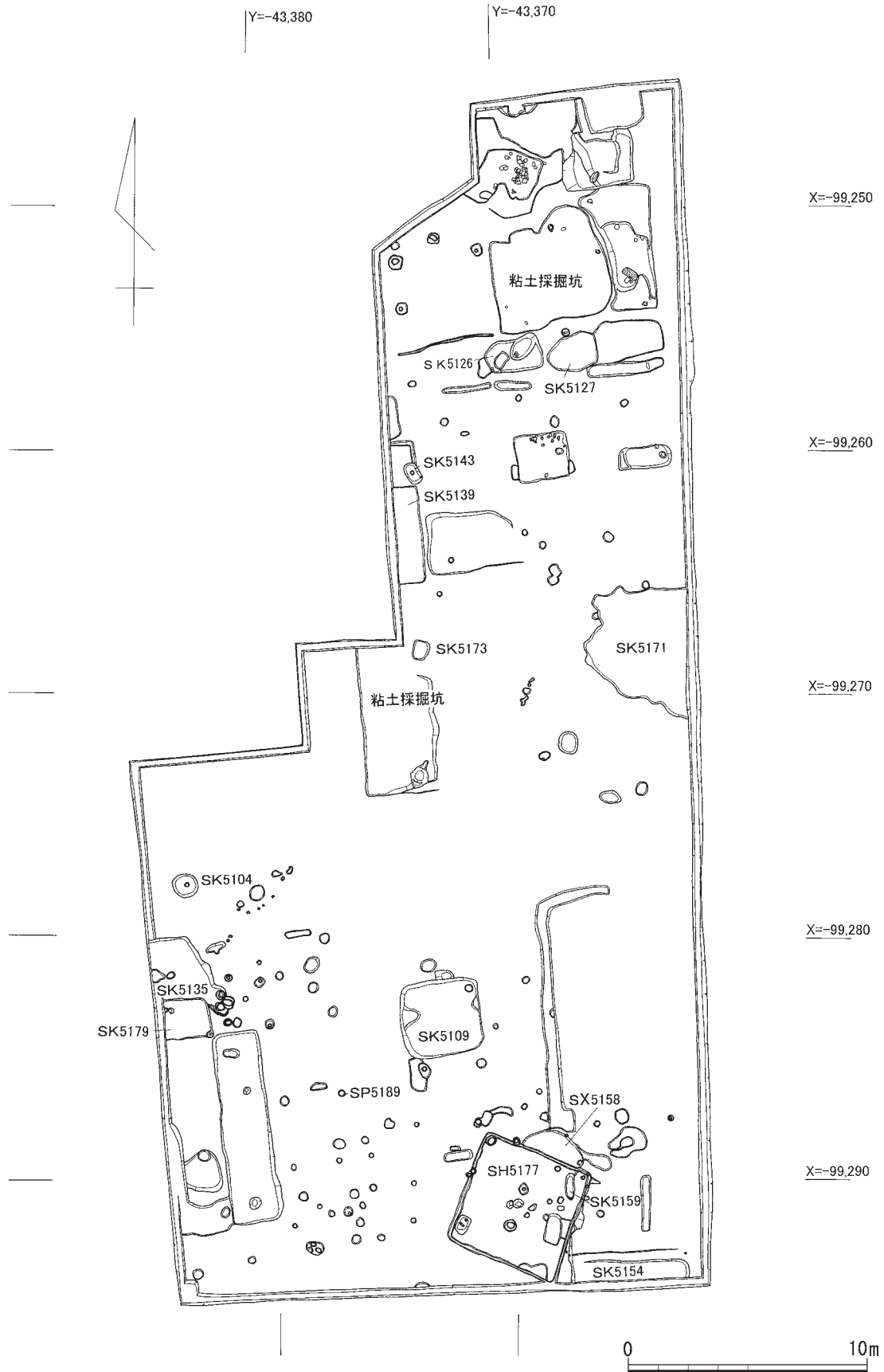
第2図 調査地位置図



第3図 1区・2区土層断面図



第4図 3区・4区土層断面図



第5図 1区遺構配置図

り、土坑内から土師器小型丸底壺1点(第16図8)が出土した。本住居跡内からは他にもう1点の小型丸底壺(第16図7)が出土しており、住居の時期は古墳時代前期に所属するものと考えられる。なお、床面から主柱穴が検出されなかったことから、この住居跡は、床面に直接柱を建てる構造をもつものと考えられ、炉の両側の柱穴は、主柱の補助としての役割をもつものと思われる。

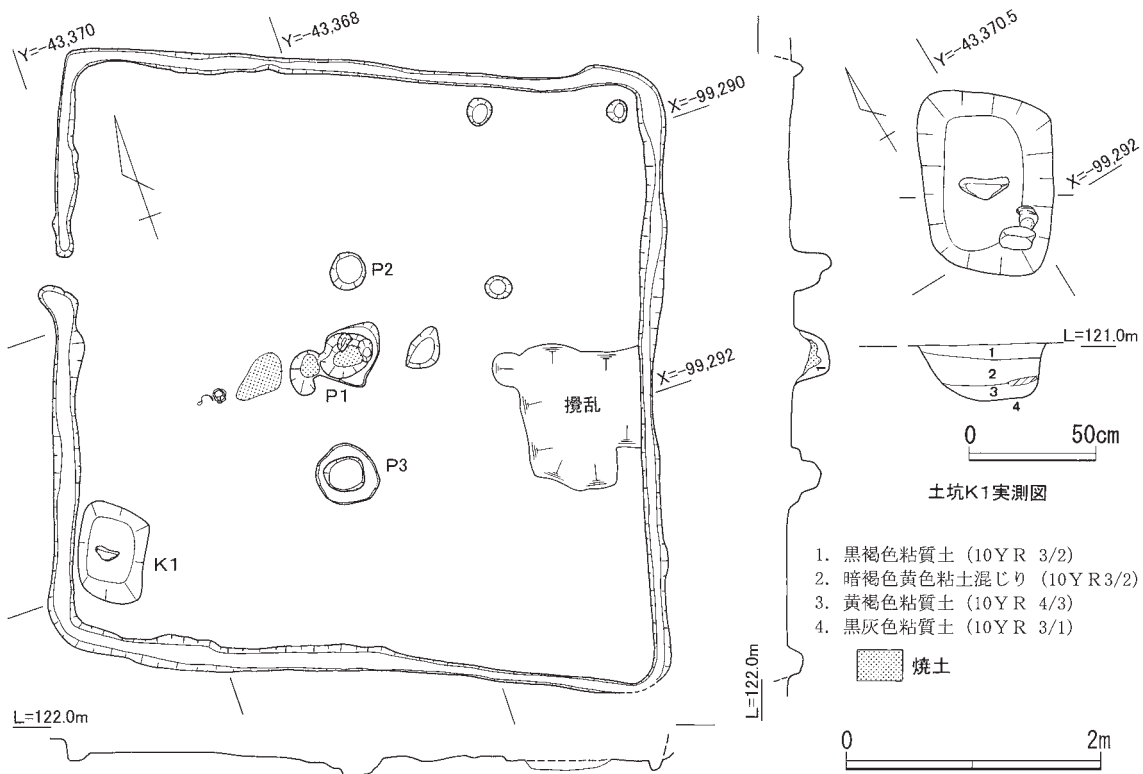
土坑群(第5図) 調査地の全域にわたって大小の土坑を検出した。主な土坑としては以下のものがある。土坑 S K 5104・5109・5127・5135・5139・5143・5154・5158・5159・5171・5173・5179・5189。

土坑 K 5109 東西約4.5m、南北約3.2mを測る大形土坑である。瓦器碗の出土から平安時代末～鎌倉時代前半と考えられる。

土坑 S K 5135・5139 平面が不整な方形を呈する。埋土から須恵器杯(第16図3・4)が出土しており、堅穴式住居跡の一部である可能性がある。

土坑 S K 5104・5143・5173(第7図) 円形ないし隅丸方形を呈する土坑である。土坑 S K 5104は円形で径1m、深さ0.5m、土坑 S K 5143は長楕円形で長軸0.95m、短軸0.55m、深さ0.37m、土坑 S K 5173は不整な方形で長軸0.75m、短軸0.7m、深さ0.65mを測る。これらの土坑の底部には径15～20cm、深さ10～30cmの小穴が穿たれており、形状は縄文時代にみられる落とし穴(陥穴状遺構)に類似する。いずれの土坑内からも遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。南丹市域の日吉町天若遺跡^(注4)からは、縄文時代後期前半頃の陥穴状遺構が多数検出されており、これらの土坑についても陥穴状遺構になる可能性が高いものと思われる。

集石遺構 S X 5158 堅穴式住居跡 S H 5177の住居跡北東部に重なる状況で検出した遺構であ

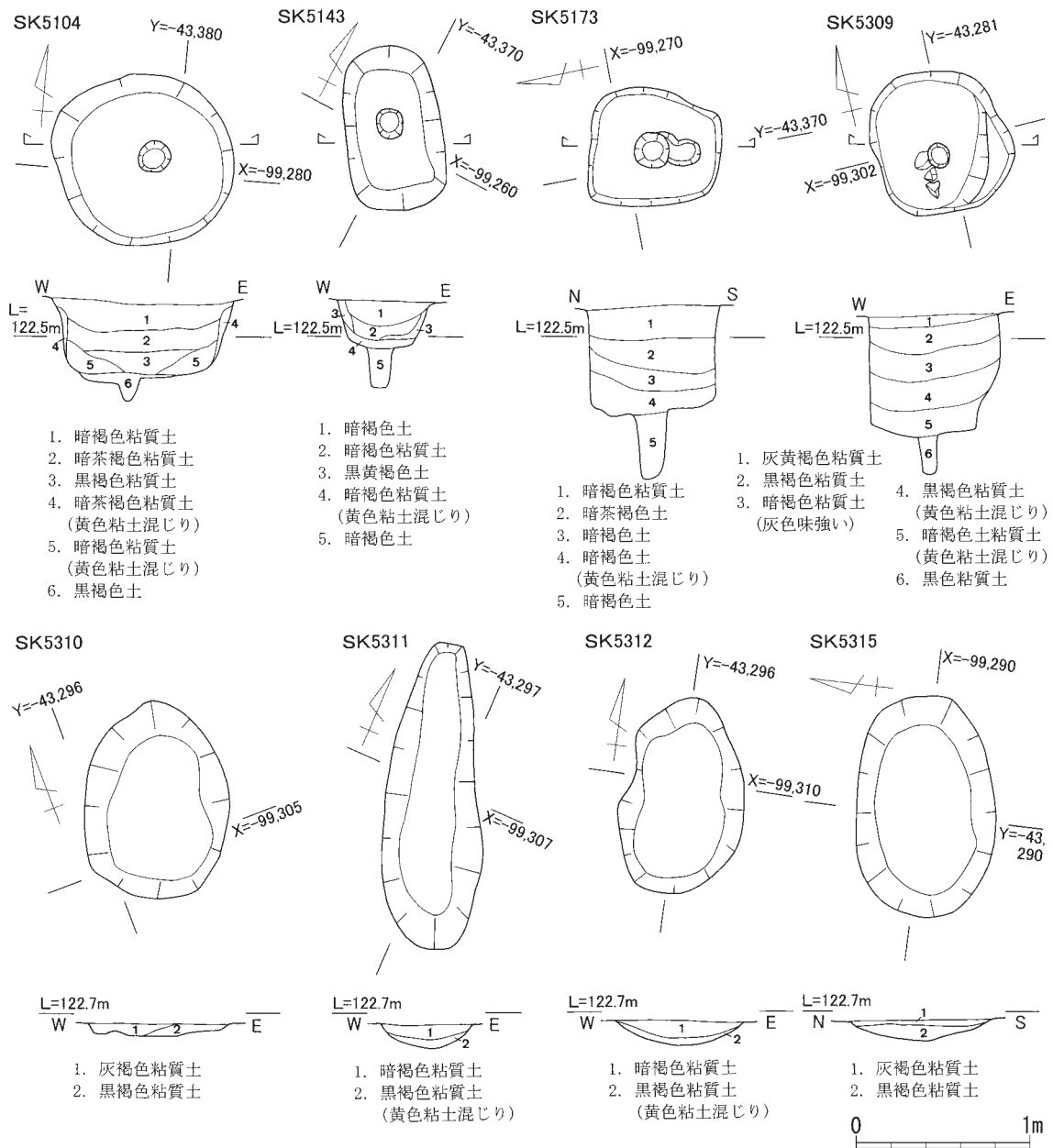


第6図 1区堅穴式住居跡 S H 5177実測図

る。径2.5m程の範囲を浅く掘り窪めその中に20~30cm大の石を寄せ集めたもので、石材に混じって瓦器や瓦質土器(第16図27)の破片が出土した。

2) 2区(第13図) 今回の調査対象地では北側部分に位置する。調査前から周囲の水田面より一段高くなっており、当初の地形が削り取られずに残されたものと考え遺構の検出を期待した。調査結果は、1区の北側と同様な粘土採掘に伴うと考えられる土坑や柱穴状のピット群・風倒木痕が検出された。柱穴状のピット群は建物跡としてはまとまらなかった。

3) 3区(第8図) 1・2区とは遺跡内を通る道路を挟んで南側に設けた調査区でトレンチの形状は略三角形を呈する。主な検出遺構としては、半地下式掘立柱建物跡2棟・掘立柱建物跡3棟・土坑群・溝・風倒木痕がある。このほか調査地全体から柱穴状のピットを検出したが建物としてはまとまらなかった。



第7図 1区・3区土坑実測図

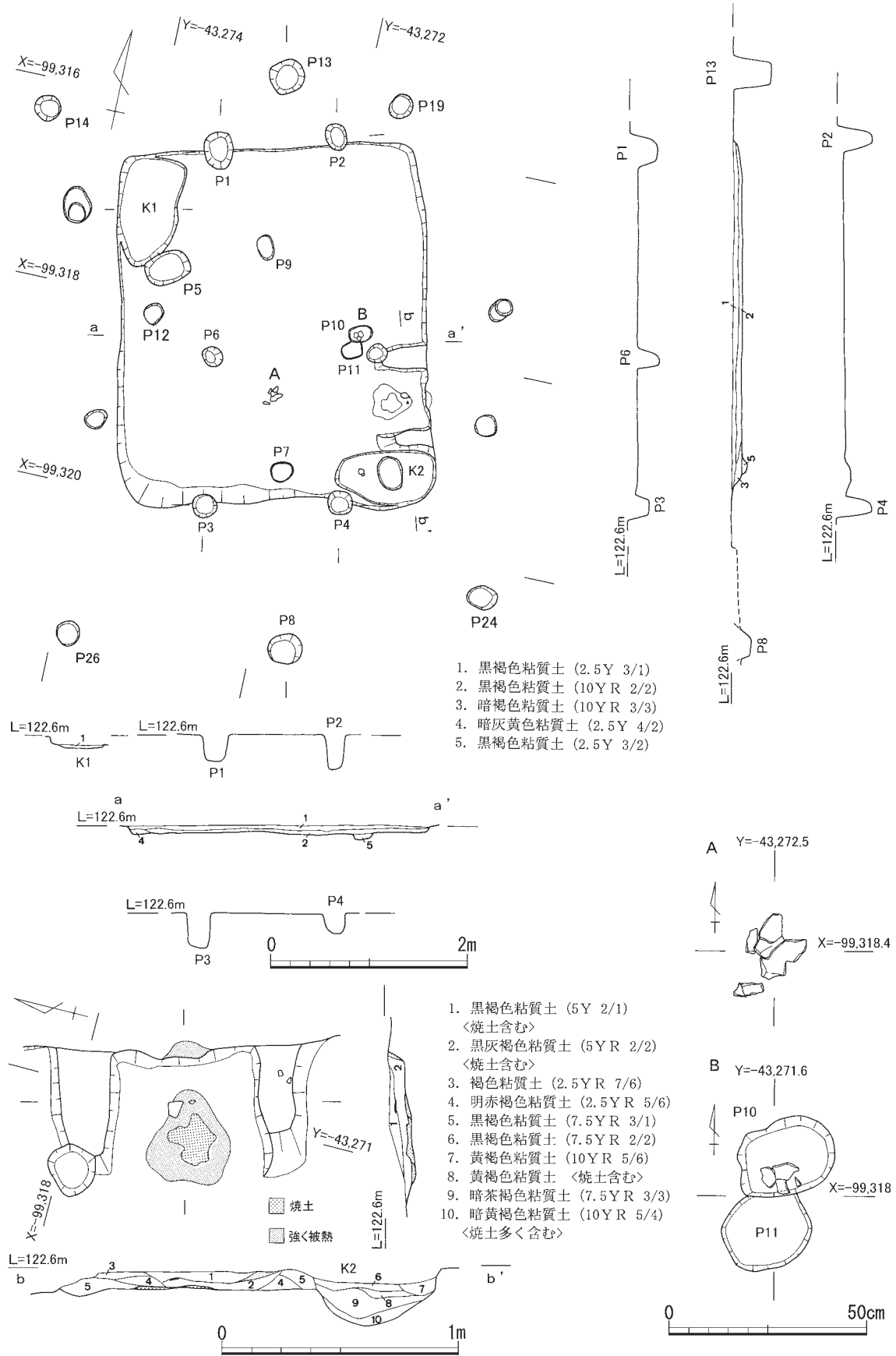


第8図 3区遺構配置図

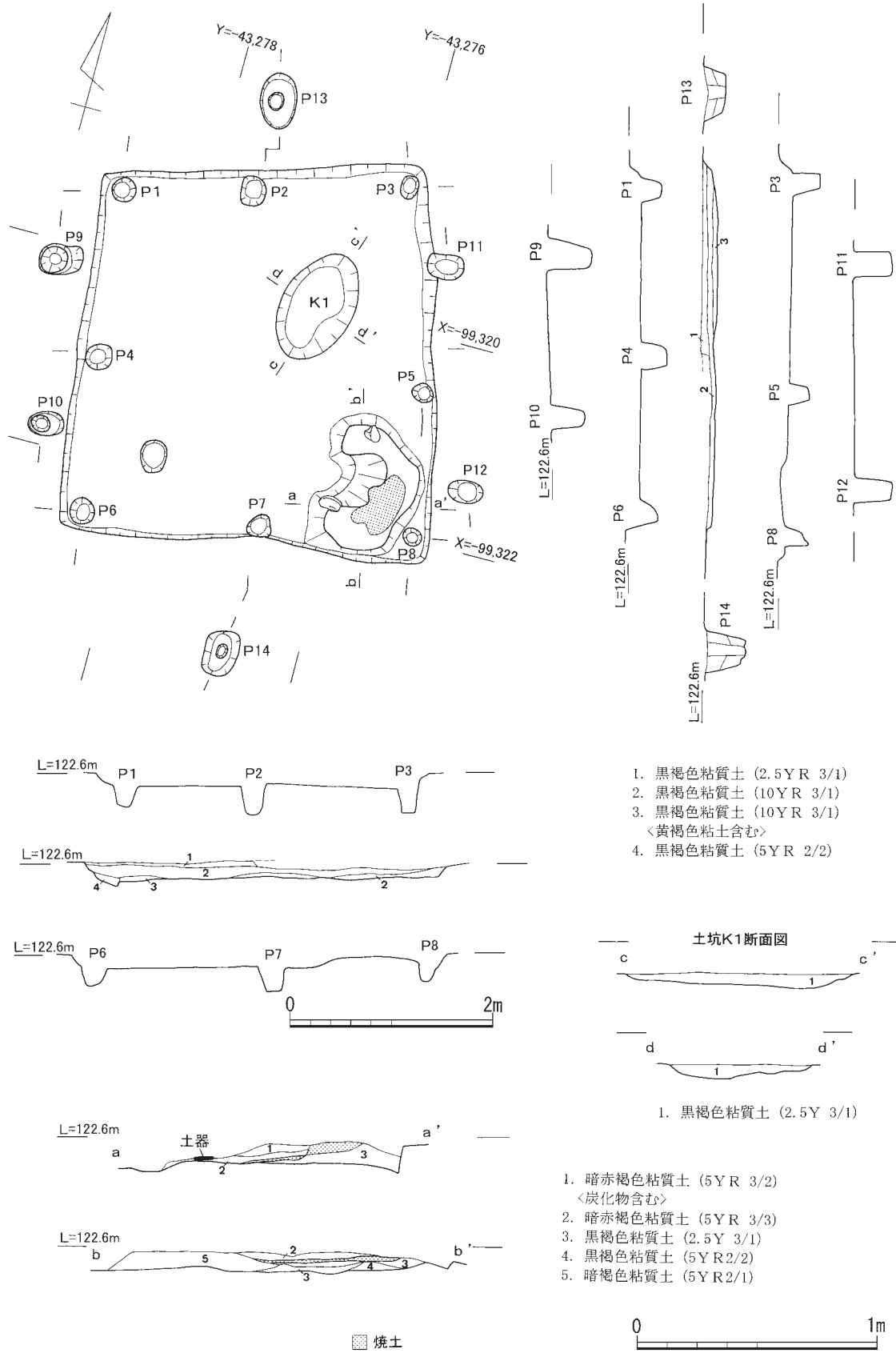
建物跡 S B 5302 (第9図) 調査地の南東で検出した建物跡で、建物跡 S B 5305と近接する。長辺(南北)3.5m、短辺(東西)3m、深さ約0.1mの長方形の竪穴状掘り込みを主体にして、竪穴の北側周壁縁に沿ってP 1・P 2、南壁縁に沿ってP 3・P 4の4基の柱穴が南北中軸線を挟んで対峙するように位置する。竪穴状掘り込みの主軸は、N 3°Wを示す。各柱穴の柱間はP 1 - P 2が約1.2m、P 3 - P 4が約1.4mを測る。各柱穴の平均径は20cmで深さは20~30cm前後を測る。北側の2柱穴の平面形は楕円形を呈する。この4本の柱穴が建物上屋を支える主柱穴と考えられ、建物跡外周の長軸中央線上に位置するP 8・P 13は、棟を支える棟持柱の役割を果たすものと考えられる。竪穴外周部に位置するP 14・P 19・P 24・P 26等の柱穴も建物の軒を外縁部から支える補助柱の機能をもつものと考えられる。竪穴の南東隅付近に長さ0.6m、幅約1mの馬蹄形の造り付け竈を付設する。上面が削平を受けており、竈が竪穴部の外側まで広がるか否かは不明確である。竈は中央部が強く焼けており、この部分が燃焼部にあたる。竈に接して土坑K 2、対角線上の北西角に土坑K 1がある。2基の土坑はいずれも平面長楕円形で底部は舟底状を呈している。竈周辺および床面から奈良時代に属する土師器甕の体部片が出土しており、建物の所属時期を示すものと考えられる。本建物跡のような平面形態に類似する建物跡は、新庄遺跡の南側に位置する室橋遺跡第5次調査で検出されている(建物跡S B 220^(注5))。第5次調査では土間をもつ半地下式の掘立柱建物跡として復原されており、内部から出土した多数の土錘や粘土塊から、これらの製作に係わる工房跡と想定されている。建物跡S B 5302では土器製作に関する遺物は認められず工房としての使用は不明であるが、時期の一致や遺構検出状況の類似点から、ここでは半地下式の掘立柱建物跡と考えておきたい。

建物跡 S B 5305 (第10図) 建物跡 S B 5302と2mの間隔を置いて西側で検出された建物跡である。建物跡 S B 5302と同じく半地下式の掘立柱建物跡と考えられる。竪穴状の掘り込みは、長辺3.6m、短辺3.5mの方形で深さ0.15mを測る。床面はほぼ平坦である。主軸はN 7°Wを示す。方形掘り込みの壁周辺に沿って各辺に3基、合計8基(P 1~P 8)の主柱穴を配置する。平均1.5mの柱間をもつが、P 3 - P 5間では2mとやや間隔を開ける。柱径は20cm、深さ20~30cm前後を測る。柱穴の検出状況からみると、P 2とP 7を結ぶ線上の外側に位置するP 13・P 14は長楕円形を呈しており、深さ40cmと他の主柱穴よりも規模が大きい。これらの柱穴は前述の建物跡 S B 5302で想定した主屋の棟を支える柱と考えたい。このほか東西辺の掘り込み外周部には、西側にP 9 - P 10、東側にP 11 - P 12の相対する柱穴がみられ、これらも主屋の軒を支える補助的な柱になるものと考えられる。建物跡の南東角に、造り付け竈と思われる黄褐色粘土塊と焼土が広がる。上方が削平されており遺存状態は悪いが、熱を受けた焼土の広がりからみて焚き口を西側にもつものと推定される。このほか、床面の北東側には長軸1.1m、短軸0.74mで浅い船底状を呈する土坑K 1がある。出土遺物については細片のみで明確でないが建物跡 S B 5302と同時期と考えられる。ただし両建物跡は近接しており、併存して建てられていたとは考えにくい。

掘立柱建物跡 S B 5303 (第11・17図) 3区中央東寄りで検出した掘立柱建物跡である。東西2間(4.4m)×南北2間(5.2m)の規模をもつ総柱建物跡(S B 5303 - a)を中心建物として、庇ま



第9図 3区建物跡 S B 5302実測図



第10図 3区建物跡S B 5305実測図

たは階段状の付属施設(S B(A) 5303-b)と中心建物の廻りを取り囲む塀または柵列(S B 5303-c)によって構成される。S B 5303-aの主軸方向はN10°Wを示す。柱掘形は、不整な円形を呈し、径約40cm、深さ50cm前後を測る。柱痕跡を残すものでは柱穴の径約20cm前後を測る。柱穴の検出状況からは建て替え等の痕跡は認められなかったが、耕作土直下からの検出状態から考えて、ある程度削平を受けているものとみられる。本建物跡の周辺や柱穴掘形の埋土上面では鉄分を含む薄い土層の堆積がみられた。主体となる建物跡S B 5303-aを構成する各9か所の柱穴は、北西角をP 1としそれぞれ南東角までP 9の番号で呼称する。各柱穴の間隔は、北側柱列(P 1-P 3)と中央柱列(P 4-P 6)では平均2.2mを測るが、南側柱列では2.4m(P 7-P 8)と1.8m(P 8-P 9)となりやや不揃いである。南北方向の柱列の間隔は各2.1m(P 1-P 4とP 3-P 6)と各2.9m(P 4-P 7とP 6-P 9)で、南側一間分の柱間隔が長くなる特徴を示す。南側柱列の間隔が揃わないことから、中心柱P 5を通る中心建物跡S B 5303-aの南北中央線の柱筋上では、北側柱P 2と中心柱P 5を結ぶ柱筋上に南側柱P 8が通らないという状況を示す。各柱穴掘形内には礫石を埋納するものがみられる。これらの礫石は検出状況からみて柱の根石とみるより柱埋設時の根固めに伴うものと考えられる。中心柱P 5は深さ50cmを測り他の柱穴に比べ深く掘られている。掘形内には径20cm前後の柱痕跡がみられ、埋土は炭化物が多く混じる。底部には東西方向に長い25cm×15cm、深さ5cmの楕円形の窪み(小穴)が掘られており、内部から青磁椀片2点と土師器皿3点が出土した(第11図、第16図19・20・25)。青磁椀片は底部を上に向け、土師器皿に重ねる状況で置かれていた。小穴内は黒色粘土が充填していたが土器類以外に遺物は出土していない。建物の中心柱としての位置からみて、これらの遺物は建物建築時の地鎮に関係するものと考えられる。

建物跡S B 5303-aの南側には1.2mの間隔を置いてP 10とP 11の2基の柱穴が分布する。柱穴P 10は建物跡S B 5303-a南側柱列のP 8から2m南側に離れて位置する。柱穴の形状や規模は建物跡S B 5303-aの柱穴群と類似する。この2基の柱穴は位置関係からみて階段あるいは建物から延びる庇の端を支える柱と想定したい。この復原案に従えば柱穴P 8とP 9の間が出入口になるものと考えられる。

建物跡S B 5303-aの周囲には、これを取り囲んで合計15基(P 12~P 26)の柱穴が分布しており、柱の配置から建物跡S B 5303-aの周囲を区画する塀もしくは柵と考えられる(S B(A) 5303-c)。各辺の柱間および規模は、北側柱列(P 20-P 22)で3間(6.3m)、西側柱列(P 22-P 26)で4間(9.5m)、東側柱列(P 15-P 20)は4間ないし5間(9.8m)、南側柱列(P 15-P 26)で4間(6.4m)ある。それぞれの柱間は、建物跡S B 5303-aに面する東西側列と北側列で2.7~3.1m(P 17-P 18は1.6m、P 18-P 19は1.5m)、それより南側の東西側列では1.8~2.1mを測り、柱間間隔はやや不揃いである。各柱穴の大きさは、南側列柱穴P 12・P 13・P 14を除き径30cm、深さ40cm前後と建物跡S B 5303-aの柱穴に比べ少し小ぶりである。P 12・P 13・P 14間はそれぞれ2.1m・2.1mを測り、西端のP 26とP 12の柱間1m、東端のP 14とP 15の柱間1.2mと比べ広い間隔を開ける。この3基の柱穴は建物全体の正面と推測する南辺に位置することや、柱穴の規

模が大きいことなどから塀・柵列に設けられた門に伴う柱と想定される。東側列のP18は掘形が浅く他の柱穴群と同一視できないが、柱間の真ん中に位置することから補助柱としての役割をもつものであろう。また、北側柱列中央の柱穴P21は、北西角柱穴P22と北東角柱穴P20を結ぶ線から14cm程北側(外側)に突出した位置にある。北辺の柱穴列を柵・塀とみる復原案の他に、建物跡S B5303-aの東西・北辺の縁側柱あるいは建物中軸線を通ることから棟持柱とも考えられるが、ここでは、建物跡S B5303-aから分離して柵ないし塀の柱列と考えておきたい。柱穴P20の掘形埋土から奈良時代の須恵器杯底部片が出土しているが混入と思われる。以上、復原案を交えながら建物の概要を述べてきた。本建物跡の周囲には他に建物跡の遺構はみられず、単独で建てられていたものと考えられる。

建物跡S B5303-aについては柱間隔が不揃いであり上部構造については不明な部分が多いが、2間四方のやや縦長の方形プランを持つ切妻屋根の高床式建物が想定される。南側妻の中央からやや東側に偏った位置に階段ないし庇を付設し、高床式建物の周囲には塀か柵をめぐらせていたものとみられる。建物の築造時期は、中心柱P5の柱穴底部から出土した地鎮に係る遺物の年代から鎌倉時代後半(13世紀末～14世紀初頭)に比定できる。建物全体の復原案からは出雲大社に代表される大社造りに類似する姿が浮かぶ。すなわち本建物の性格については、一般の住居とみるより、神社等の祭祀に係る建築物の可能性が高いものと思われる^(注6)。

掘立柱建物跡S B5307(第8図) 調査区東側で検出した東西2間(4.3m)×南北2間(5m)の掘立柱建物跡である。建物の主軸はN15°Wを示す。各柱穴の柱間隔は、約1.8～2.5mを測る。柱穴は円形で径約20cm、深さ約20cmを測る。出土遺物がなく時期は不明である。

掘立柱建物跡S B5308(第8図) 掘立柱建物跡S B5307の東側に接して検出した建物跡で、南北3間(7.2m)、東西2間以上の規模をもつ。建物の主軸はN7°Wを示す。建物の東側は調査地外になる。柱穴は円形で径約30cm、深さ20cm前後を測る。掘立柱建物跡S B5307と近接しており、2棟の建物の時期は異なるものと思われるが先後関係は不明である。また、本建物跡は掘立柱建物跡S B5303と建物方位が近似するが、出土遺物がなく時期については不明である。

土坑群(第7・8図) 調査地中央部から北側にかけて9基の土坑を検出した(S K5304・5309～5316)。

土坑S K5304 短軸2.8m、長軸4.5m以上の不整形土坑で北端部に径10cmの円形ピットを2か所にもつ。青磁碗の小片が出土した。

土坑S K5309～5316 長さ2～0.8m、幅0.6～0.5mを測る長楕円形ないし円形の土坑である。底はいずれも船底状を呈する。出土遺物に乏しく時期は不明である。土坑S K5309は径0.85mの不整形円形で深さ70cmを測る。内部からは10cm大の石材が出土した。土坑の底部中央部に径10cm、深さ20cmの小穴を穿つ。出土遺物がなく時期は不明であるが、1区から検出された陥穴状遺構に類似する。

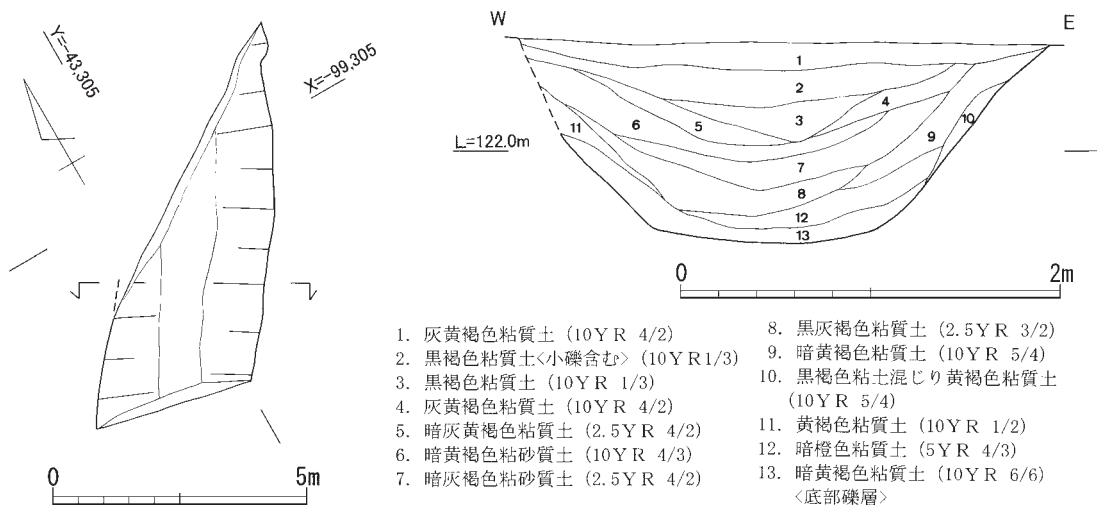
土坑S K5306 前述の土坑群から離れて調査地南東端で検出した。長軸約1.5m、短軸最大0.5mを測り平面形は不整である。内部は2段に掘られている。内部から焼土と炭化物が出土したが、

出土遺物がなく時期・性格等は不明である。

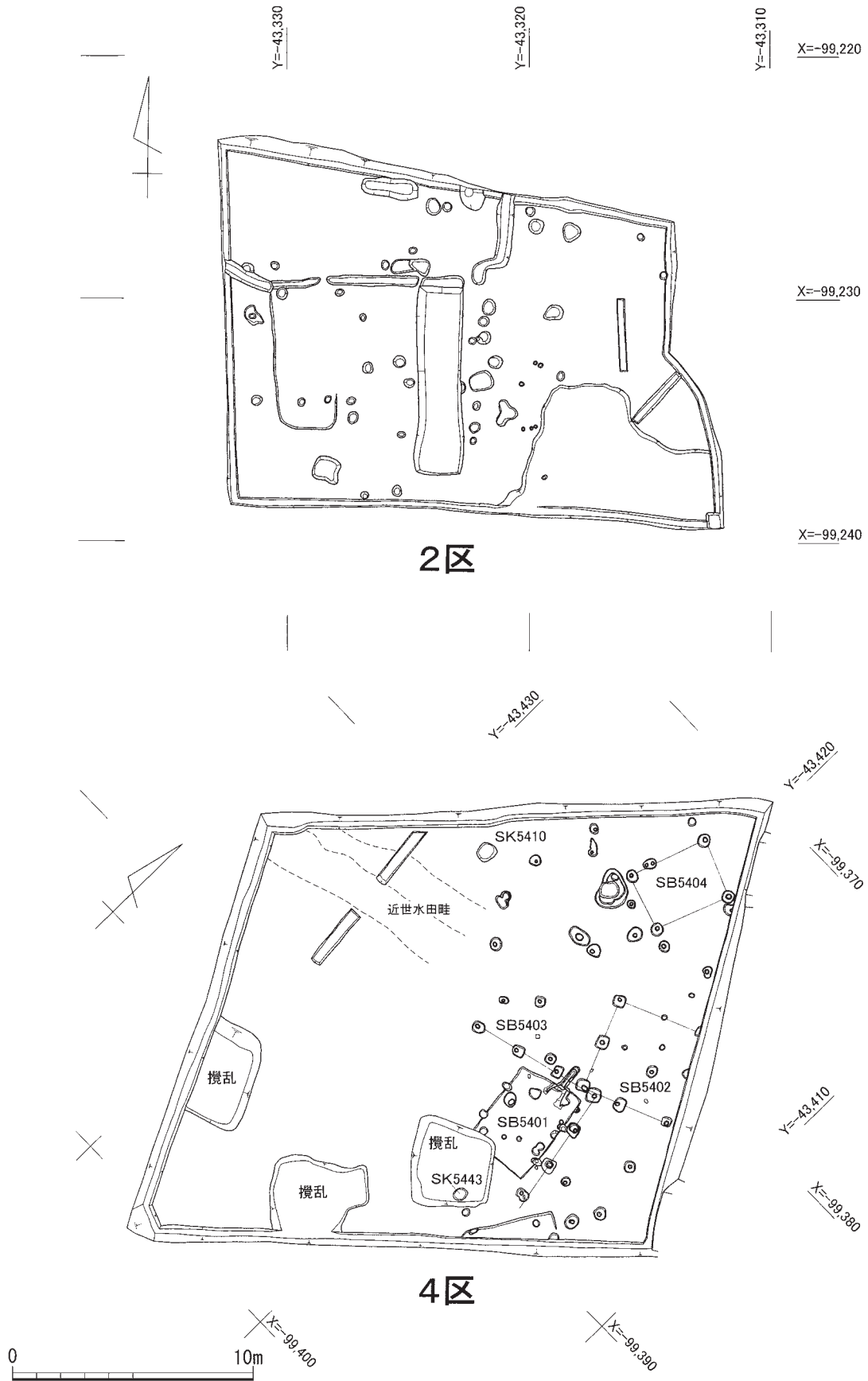
溝S D5301(第8・12図) 調査地西端で検出した溝で、北東から南西方向に延びる。規模は、幅3m、深さ約1.1mを測る。溝断面は底が平坦な台形状を呈し、溝底部は砂礫層まで掘削する。溝内の堆積層の状況から上層(1～3層)とそれ以下の層に大きく分けられる。明瞭な砂や砂礫層は認められず、下層堆積層の形成後浅い溝として残存し、その後徐々に埋没したものと考えられる。溝内からは遺物が出土しておらず時期は不明である。

4) 4区(第13図) 調査対象地の南西側に設置した調査区である。主要な検出遺構としては竪穴式住居跡1基・掘立柱建物跡3棟・土坑2基等がある。当調査地区は、南西側に向かって地形が下がり、また、近現代の置土や掘削によって西側半分は大きく攪乱を受けており、検出遺構の大部分は調査地中央部から東側に分布する。

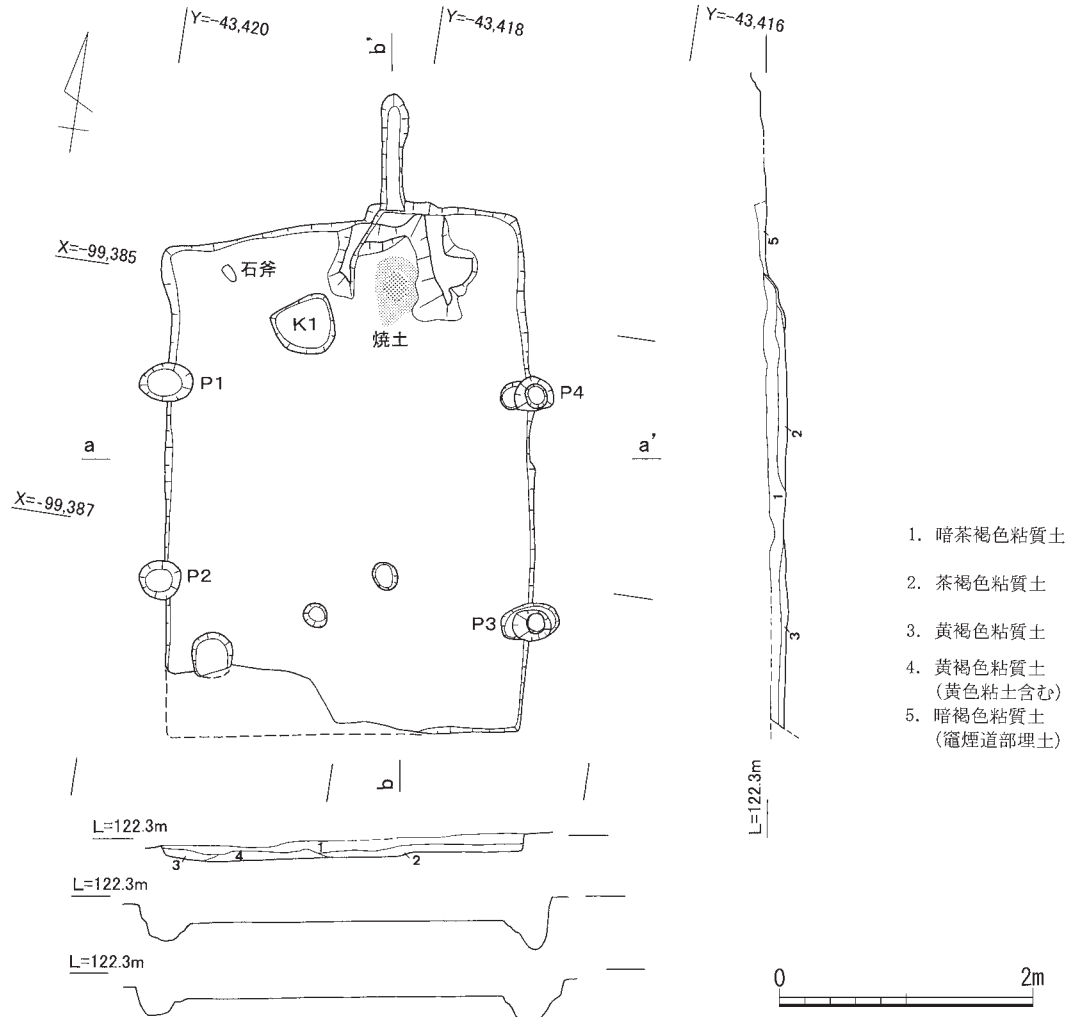
竪穴式住居跡S H5401(第14図) 調査区南東側で検出した。南西隅を欠くが、住居の規模は、東西約3m、南北約4mで平面は長方形を呈する。残存部の深さは0.15mを測る。住居の主軸は、N7°Wである。住居に伴う柱穴は、床面では確認されず、住居の東西辺の壁に接して柱穴と思われるP1～P4が検出された。各柱穴の径は約30～40cm、深さ20cmを測る。柱穴は住居跡の内側と外側にまたがっており、P1とP4では長楕円形を呈する。柱間間隔はそれぞれP1-P2間が1.6m、P3-P4間が1.9mを測る。住居跡北側辺の中央やや東寄りに平面馬蹄形を呈する造り付け竈を付設する。竈の規模は幅1.2m、長さ0.9mを測る。竈は小礫を混じえた黄色粘土で構築されており、焚口付近は強く火を受け硬く焼けしまっている。竈の上部が崩れた時に堆積した焼土と灰を含む埋土の中から土師器片が出土した。竈北端から住居跡の外側に向かって灰と焼土が混じる煙道状の遺構が約1mにわたって延びるが、上面が削平されており詳細は不明である。竈の南西側には土坑K1がある。貯蔵穴としては底部が船底状で浅いものである。このほか住居に伴う貼床や周溝等の施設は認められなかった。住居内の遺物としては、竈北東側の住居跡上面部で出土した須恵器杯身(第16図5)と杯蓋(第16図2)がある。これらの須恵器は7世紀中葉から後



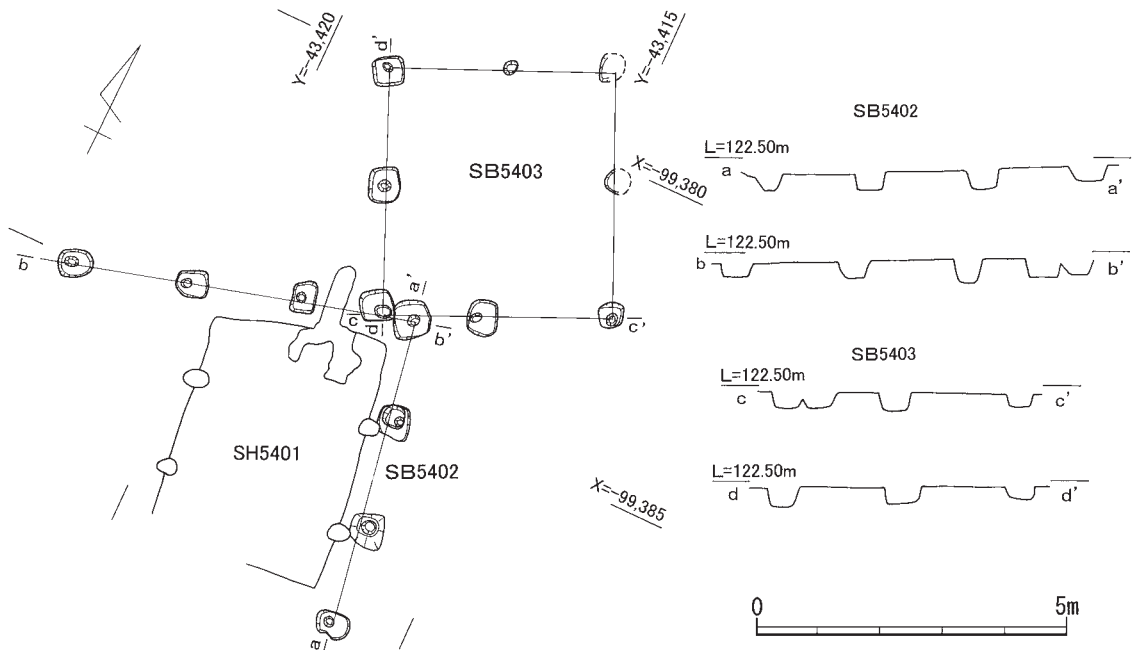
第12図 3区溝S D5301実測図



第13図 2区・4区遺構配置図



第14図 4区竪穴式住居跡SH5401実測図



第15図 4区掘立柱建物跡SB5402・5403実測図

半頃に属するもので、おおむね住居跡の所属時期の一端が窺える。このほか、住居跡北西角付近の床面上から、破損した弥生時代の大型蛤刃石斧が1点出土した。再利用するため住居内に持ち込んだものと考えられる。本住居跡は調査の結果、支柱穴の位置が通例の竪穴式住居跡と異なった位置に配置されていることが判明した。実際の検出作業においては、住居跡は黒色粘土層から掘り込まれており、住居内の埋土と見分けが付きにくく輪郭の確認は容易でなかったが、ここでは調査結果を踏まえ以上の通り報告しておきたい。今回調査地の3区や室橋遺跡では、奈良時代の時期に土間をもつ半地下式の掘立柱建物跡が出現しており、これらと何らかの関連をもつものとする。

掘立柱建物跡 S B 5402 (第15図) 竪穴式住居跡 S H 5401 に近接して検出された L 字形の掘立柱列である。東西 3 間分、南北 3 間分を確認したが掘立柱建物か柵になるかは不明である。ここでは掘立柱建物跡としておく。柱掘形は隅丸方形で一辺 40cm 前後を測る。径 10cm 前後の柱穴をもつものがある。各柱間は 1.8m 等間を測る。竪穴式住居跡 S H 5401 の北辺・東辺を囲むように位置しており、これに關係する施設の可能性もあるが、住居跡の柱穴 P 4 を本建物の柱掘形が切っており、本建物が後出するものであることがわかる。

掘立柱建物跡 S B 5403 (第15図) 調査地の東側で検出した。南北 2 間 (3 m) × 東西 2 間 (3 m) の方形建物に復原できるが、さらに東側の調査地外に延びる可能性がある。建物の主軸は N 22° W を示す。柱掘形は隅丸方形で一辺 50cm 前後を測り、柱間はおおむね 1.8m を測る。本建物南西角の柱掘形が掘立柱建物跡 S B 5402 の北東角の柱掘形によって切られており、時期の前後関係が窺える。柱掘形の形状から奈良～平安時代と想定される。

掘立柱建物跡 S B 5404 調査地の北東角で検出した。東西 1 間 × 南北 1 間分が復原できるが、周囲に同規模の柱穴が分布しておりさらに規模が大きくなる可能性がある。建物の主軸は N 22° E を示す。時期は不明である。

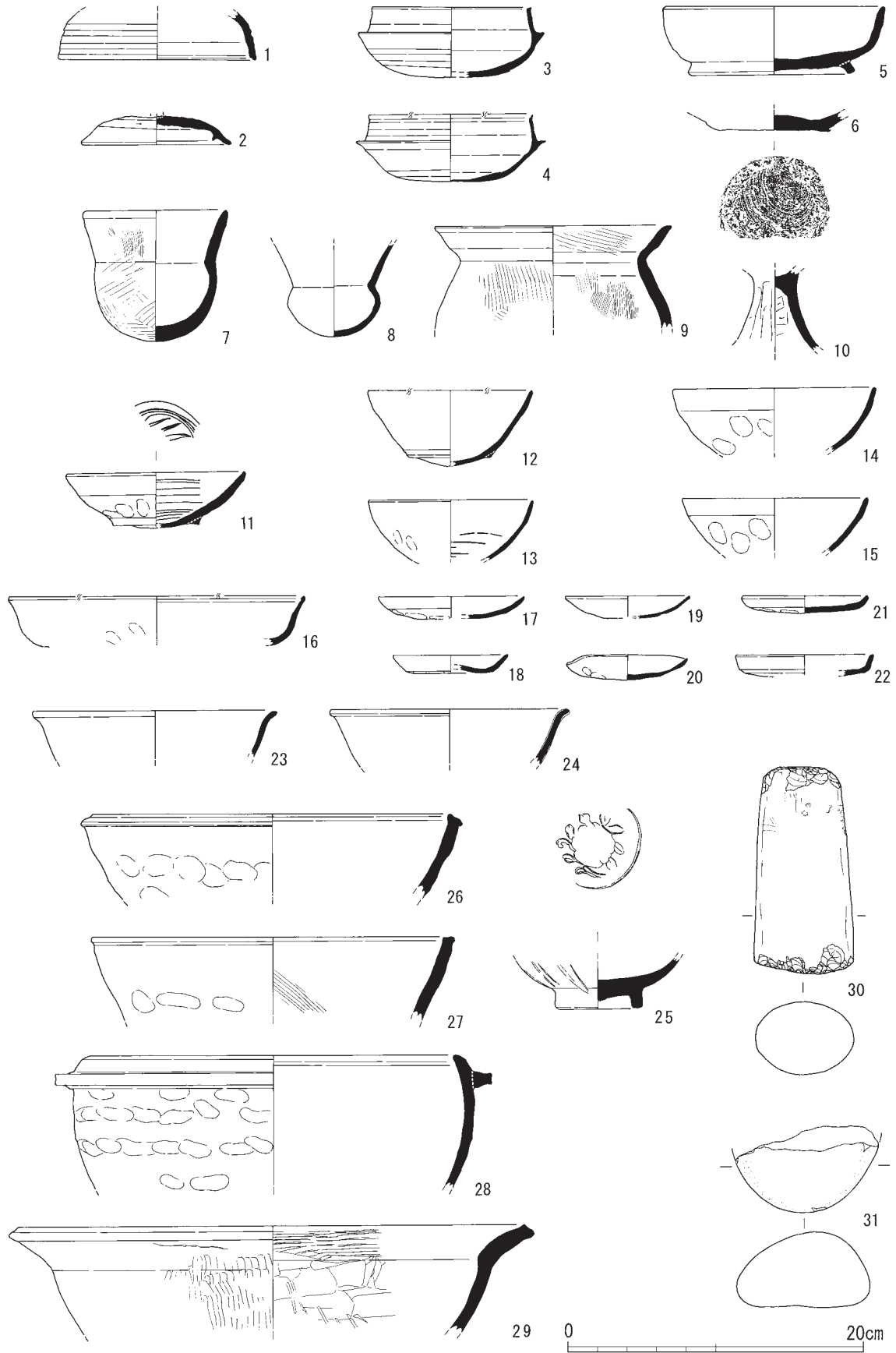
土坑 S K 5410 調査地中央北側で検出した。長軸 0.87m、短軸 0.8m、深さ 0.2m の楕円形を呈する。時期、性格等は不明である。

土坑 S K 5443 調査地中央南側で検出した径 0.6m を測る円形土坑である。最近の攪乱坑によって上面を削平されている。時期、性格等は不明である。

4. 出土遺物(第16図)

今回の新庄遺跡で出土した遺物の総量は、整理箱で 8 箱である。総じて残りが悪く図化できたのは少量である。以下、各地区一括して、種類毎に述べる。

1～5 は須恵器である。1 は、杯蓋である。復原口径 13.2cm を測る。天井部は欠損する。口縁部に 1 条の凹線がめぐり、口縁部端部内面に沈線を施す。色調は明灰色を呈する。所属時期は 6 世紀後半である。2 は内面端部近くにかえりをもつ杯蓋である。口径 10cm を測る。天井部の頂部に宝珠形のつまみを有するものであるが欠損する。色調は青灰色を呈する。口径がやや縮小し、時期は 7 世紀中頃に属する。3・4 は杯身である。蓋受部からやや内傾する深いちあがりをも



第16図 出土遺物実測図

つ。端部は段をつくる。底部はヘラケズリ後、ナデによる調整を行う。3は口径10.7cm、高さ4.8cm、4は口径10.4cm、高さ4.6cmを測る。色調は青灰色を呈する。時期は6世紀前半に属するものである。5は高台を伴う杯身である。口縁部は底部からゆるやかに外反する。高台の貼付け位置は底部のやや中央寄りにある。口径15.2cm。高さ4.7cmを測る。7世紀末から8世紀初頭に属するものと思われる。1は4区溝S D5405、2・5は4区竪穴式住居跡S H5401、3は1区土坑S K5139、4は1区土坑S K5135から出土した。6は糸切り痕を残す須恵質土器の底部である。色調は青灰色をする。時期の詳細は不明であるが、平安時代に属する在地産のものと思われる。1区の出土である。

7～10は土師器である。7・8は小型丸底壺である。体部から直線的にのびる口縁部をもつ。7の口縁端部はナデで丸く仕上げる。体部外面は粗いハケ目、口縁部は縦方向のハケ目を施す。口径9.5cm、高さ8.8cmを測る。色調は暗黒褐色を呈する。8は表面の磨滅が著しく調整不明である。体部の最大径は6.3cmを測る。所属時期は古墳時代前期(4世紀前半)に属するが、口縁部の広がり小さく器壁も厚いことから、やや新しい段階に編年されるものである。7は1区竪穴式住居跡S H5177、8は同住居跡に伴う土坑K 1から出土した。9は甕体部上半から口縁部片である。口縁部外面はナデ調整する。肩部外面と口縁部内面は粗いハケ目を施す。色調は明茶褐色である。復原口径は15.8cmを測る。10は高杯脚部で、杯受部を欠失する。脚部外面は縦方向のヘラケズリを施す。色調は明茶褐色を呈する。残存高は5.5cmを測る。時期は古墳時代前期に属する。9は1区土坑S K5135。10は1区土坑S K5177から出土した。

11～15は瓦器碗である。口径11.1～13.6cmを測る。口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。11・12の底部の高台は三角形状で突出が小さく不安定である。体部外面に指オサエの痕がみられるものもある(11・14・15)。11は内側見込みにジグザグ状の暗文をもつ。色調は、12は磨滅が著しく灰白色を呈するが、他は黒灰色である。所属時期は、いずれも13世紀後半に含まれるものである。11は1区土坑S K5127、12・13は1区土坑S K5109、14は1区土坑S K5126、15は1区土坑S K5154から出土した。

16～22は土師器皿である。16は底部から口縁部が外反気味に外上方に立ち上がるもので、口縁端部はナデで丸く仕上げる。内外面ともにていねいなヨコナデを施す。復原口径は20cmを測る。色調は淡橙褐色を呈する。形態からみて時期は奈良時代に属する。17～22は中世の小皿類である。法量は復原口径7.8cm(18)～9.8cm(17)、高さ1.2～1.7cmを測る。形態は、底部から口縁部が緩やかに外上方のびるもの(17～20)と、底部端からやや屈曲して短く立ち上がるもの(21・22)がある。前者のうち19・20は器壁が薄い。いずれも底部は指オサエ、内面と口縁部外面は横ナデを施す。色調は17が明白褐色、18～20は淡橙褐色、21・22は明褐色を呈する。所属時期は13世紀後半に比定される。16は3区建物跡S B5302、17・21は1区土坑S K5159、18は1区土坑S K5109、19・20は3区掘立柱建物跡S B5303柱穴P 5、22は3区柱穴S P5321から出土した。

23～25は中国製青磁碗である。23・24は口縁部の破片で、口縁端部はやや外反気味に屈曲させる。復原口径は14～15cm前後を測る。25は底部片である。厚い底部に断面方形の高台を貼り付け

る。内面見込み部には花文状の陰刻文、体部外面には蓮弁文を施す。底部は露胎である。色調は23・24が薄緑灰色、25は緑色を呈する。所属時期は、23・24がおおむね14世紀、25は13世紀後半～14世紀初頭である。なお、23は3区掘立柱建物跡S B5303柱穴P7とP16から出土した破片の接合資料である。25は同掘立柱建物跡S B5303柱穴P5からの出土で、底部破片に接して別に口縁下半部の破片(25-b)が出土した。同型式のものであるが両者は別個体で接合しなかった。上記の土師器皿(19・20)とともに柱穴底部埋納の一括資料である。

26～28は瓦質土器である。26・27は鉢類の口縁部で、口縁端部に強いナデを施し面を成す。体部外面はユビオサエ、27の内面はハケ目を施す。26は復原口径24.2cm、27は同24.4cmを測る。色調は黒灰色である。28は口縁端部からやや下がった位置に断面台形状の短い顎部をもつ羽釜である。復原口径25.5cmを測る。口縁端部はやや内傾する。口縁端部と顎部はユビナデ、体部外面はユビオサエを施す。色調は黒灰色を呈する。いずれも所属時期は13世紀に比定されるものである。26は1区土坑S K5158、27・28は1区土坑S K5179から出土した。

29は軟質の土師器鍋と思われるものである。口径は34cm前後に復原される。体部から口縁部が外上方にのび、端部に面をもつ。体部外面は縦方向の太いハケ目、口縁部内面には横方向のハケ目が施されている。色調は明褐色を呈し、体部外面には煤が付着する。上記の瓦質土器類と同じく13世紀に属するもので、3区から出土した。

30は弥生時代の大型蛤刃石斧の基部である。砂岩製で頭頂部と刃部破損部周辺に打痕が残り再利用したものと思われる。残存部の重量840g。4区竪穴式住居跡S B5401床面から出土したもので、ハンマー等に転用するために運ばれたものと考えられる。31は敲き石の破損品である。残存部の重量350g。砂岩製で弥生時代のものと思われるが、出土した4区では同時期の遺構は確認されておらず運ばれてきた可能性が高い。

5. まとめ

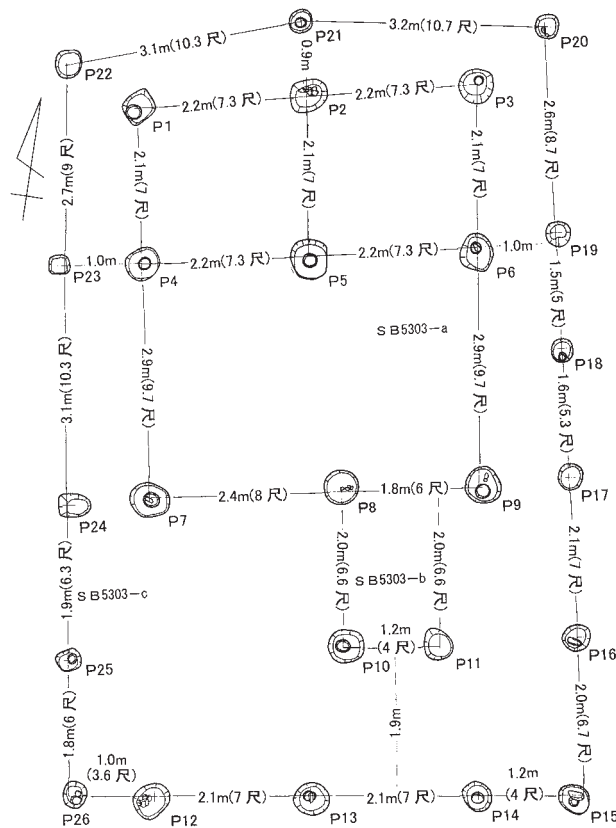
今回の新庄遺跡の調査では、後世の水田耕作等により削平を受け遺構の遺存状況は必ずしも良好ではなかったが、4か所の調査区から古墳時代～中世に所属する遺構・遺物等を検出した。主な検出遺構としては、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑等がある。このうち1区で検出した竪穴式住居跡S H5177は古墳時代前期に比定され、これまで新庄遺跡で確認された竪穴式住居跡のなかでは最も古い時期に属するものである。周辺の室橋遺跡などでは古墳時代中期の時期に造り付け竈を付設するものが出現するが、本住居跡は当地域の竈出現以前の竪穴式住居跡の変遷を知る上で新たな資料を加えることになった。

3区で検出した2基の建物跡S B5302・5305は、室橋遺跡第5次調査で検出された奈良時代に属する建物跡S B220と同様、主屋本体部分の床面を掘り窪め半地下式の土間とした掘立柱建物と考えられる。今回検出した2基の建物の柱位置はそれぞれ異なっているが、これらが時期的な変遷を示すものかどうかは明らかでない。室橋遺跡では、生産活動に伴う工房としての性格が考えられているが、建物内からは工房を窺わせるような遺物は出土しなかった。奈良時代に当遺跡

や周辺の室橋遺跡において、屋内に炉や竈を付設して火力を用いた工房建物が存在することは、同時期の生産活動の実態を知る上で、今後、注意すべき資料になるものと思われる。

同じく3区で検出した掘立柱建物跡S B5393については、上部構造については推測の域をでないが、高床式切妻建物で周囲を塀か柵で囲まれた姿を想定しておきたい。本体の建物が狭い空間に配置され、近接して他の建物がみられないことから、日常的な住居とするより集落から隔てて置かれた倉あるいは祭祀に係る建物の可能性が考えられる。今回検出した建物を構成する柱配置は、出雲大社に代表される神社建築である大社造りの形状にきわめて類似している点に注意される。建物の所属時期は、心柱にあたる柱穴P5から出土した地鎮に伴うものと想定される青磁椀片・土師器皿から13世紀末～14世紀初頭の鎌倉時代に比定できる。近年、古代に遡る神社建物跡の調査例が各地で報告されているが、中世以後の神社建築については建物自体が現存するものも多く考古学的な調査はあまり行われていないのが現状である。今回検出した掘立柱建物跡S B5393の周囲からは祭祀行為を窺わせる遺物は出土しておらず、神社遺構と断定するには内容不足の感があるが、今後の事例の増加を期待して現時点では上記のように神社跡の可能性を考えておきたい。

新庄遺跡を含む南丹市八木町北部域には、平安時代に「吉富荘」と呼ばれる荘園が存在した。荘園内の様相は、承安4(1174)年に成立した後白河院法華寺領の吉富荘の絵図の写しとされる「丹波国吉富庄絵図写」によって一端を知ることができる。平安時代末期には後白河院から神護寺に寄進されるが、新庄遺跡周辺には神護寺を再興した文覚上人(1139～1203年)によって文治4



第17図 掘立柱建物跡S B5303柱間寸法

(1188)年に作られたと伝える新庄用水が残る。このほか新庄遺跡南西の谷合には「文覚池」があり、また、付近には室橋の名の起こりとなった文覚堂(室橋堂)が存在する。これらは周辺に広く伝わる文覚伝承にすぎないが、近年の室橋遺跡や野条遺跡では府道建設やほ場整備に伴う発掘調査によって、古墳時代から平安時代にかけての灌漑用水と思われる大小の溝が多数検出されている。当地域は亀岡盆地を流れる桂川(大堰川)の上流部にあり、桂川から盆地内へ用水を引き込むに当たっては最も適した地点に位置している。おそらく荘園成立以前から当地域の開発に伴って幾つもの灌漑用水路が掘削されて来たものと思われる。今回、3区では大規模な溝の一角が検出された。溝の時

期については不明であるが、溝の掘削状況は周辺の遺跡で見られる溝群と類似しており、同様な性格をもつものと考えられる。

今回の調査によって新庄遺跡内の遺構の分布範囲や遺存状況が明らかになった。後世の水田耕作や土取りによる削平のため、必ずしも残存状態は良好ではないが、各時代の遺構が広範囲に分布することが判明した。周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しており、これらの遺跡との関係についても今後さらに詳しくみていく必要がある。

(辻本和美)

注1 谷口悌「町内遺跡発掘調査概要－第1次新庄遺跡－」(『八木町文化財調査報告書』第5集 八木町教育委員会) 1999

谷口悌「町内遺跡発掘調査概要－第2次新庄遺跡－」(『八木町文化財調査報告書』第7集 八木町教育委員会) 2000

谷口悌「新庄遺跡発掘調査概要－第3次調査概要－」(『八木町文化財調査報告書』第8集 八木町教育委員会) 2001

辻健二郎「新庄遺跡第4次調査」(『南丹市内遺跡発掘調査報告書』平成19年度 南丹市教育委員会) 2008

注2 調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

作業員 広瀬伊佐夫・杉山雅之・西垣久江・松本敏子・笠浪恒正・若井邦明・麻田忠晴・八木辰男・松本拓・三髯順子・平井美登里・木村末子・西田恵美子・矢木正代・麻田榮子・竹井美津子・小林義明・中川智子・関岡一・大場信行

補助員 天池佐栄子・廣瀬慶典・松元和也・野中洋志

整理員 寺尾貴美子・松下道子・長尾美恵子・井上聡・茶園矢壽子・清水友佳子

注3 『京都府の地名-日本歴史地名大系第26巻-』平凡社 1981

注4 三好博喜「天若遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注5 高野陽子「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第128冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注6 掘立柱建物跡S B5303の建物構造については、京都府教育庁指導部文化財保護課吉田理氏より有益なご教示を得た。

圖 版



(1) 新庄遺跡調査地遠景（上が北）



(2) 新庄遺跡調査地遠景（上が西）



(1) 1区調査地全景（東から）



(2) 1区調査地全景（上が東）



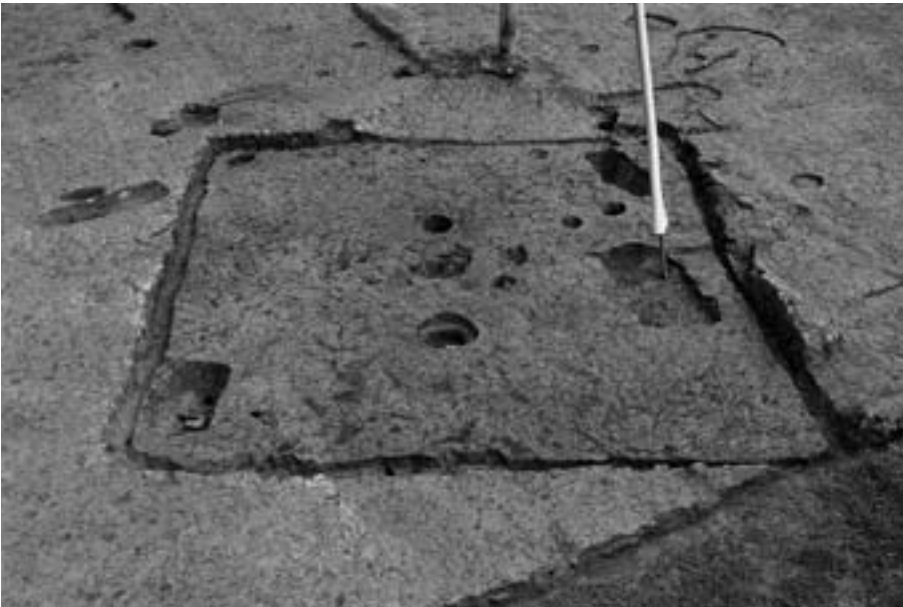
(1) 1区竪穴式住居跡S H 5177 (北東から)



(2) 1区竪穴式住居跡S H 5177 (上が南東)



(1) 1区竪穴式住居跡 S H 5177
(北西から)



(2) 1区竪穴式住居跡 S H 5177
(南西から)



(3) 1区竪穴式住居跡 S H 5177 内
土坑 S K 5190 (南西から)



(1) 1区調査地西部柱穴群(南から)



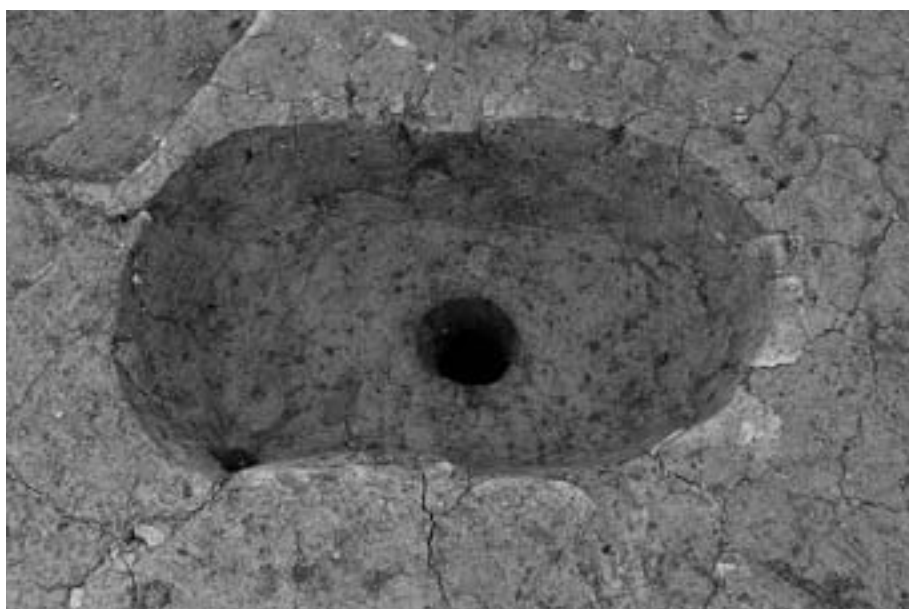
(2) 1区土坑S K 5190(西から)



(3) 1区土坑S K 5179(東から)



(1) 1区土坑S K 5104 (東から)



(2) 1区土坑S K 5143 (東から)



(3) 1区土坑S K 5173 (東から)



(1) 1区集石遺構 S X 5158
(南西から)



(2) 1区集石遺構 S X 5158(西から)



(3) 1区調査地北部粘土採掘土坑群
(東から)



(1) 2区調査地全景（南から）



(2) 2区調査地全景（上が北）



(1) 2区調査状況（南から）



(2) 2区調査状況（東から）



(3) 2区西部柱穴状遺構（南西から）



(1) 3区調査地全景（上が東）



(2) 3区調査地西部遺構群（東から）



(1) 3区調査地東部遺構群 (南東から)



(2) 3区建物跡S B 5302 (右)、S B 5305 (左) (北から)



(1) 3区建物跡S B 5302・5305
検出状況（東から）



(2) 3区建物跡S B 5302・5305
検出状況（南東から）



(3) 3区建物跡S B 5302・5305
（左側）（北から）



(1) 3区建物跡 S B 5302 (北から)



(2) 3区建物跡 S B 5302 (西から)



(3) 3区建物跡 S B 5302 竈・
土坑 K - 2 (西から)



(1) 3区建物跡S B 5305 (北から)



(2) 3区建物跡S B 5305 (西から)



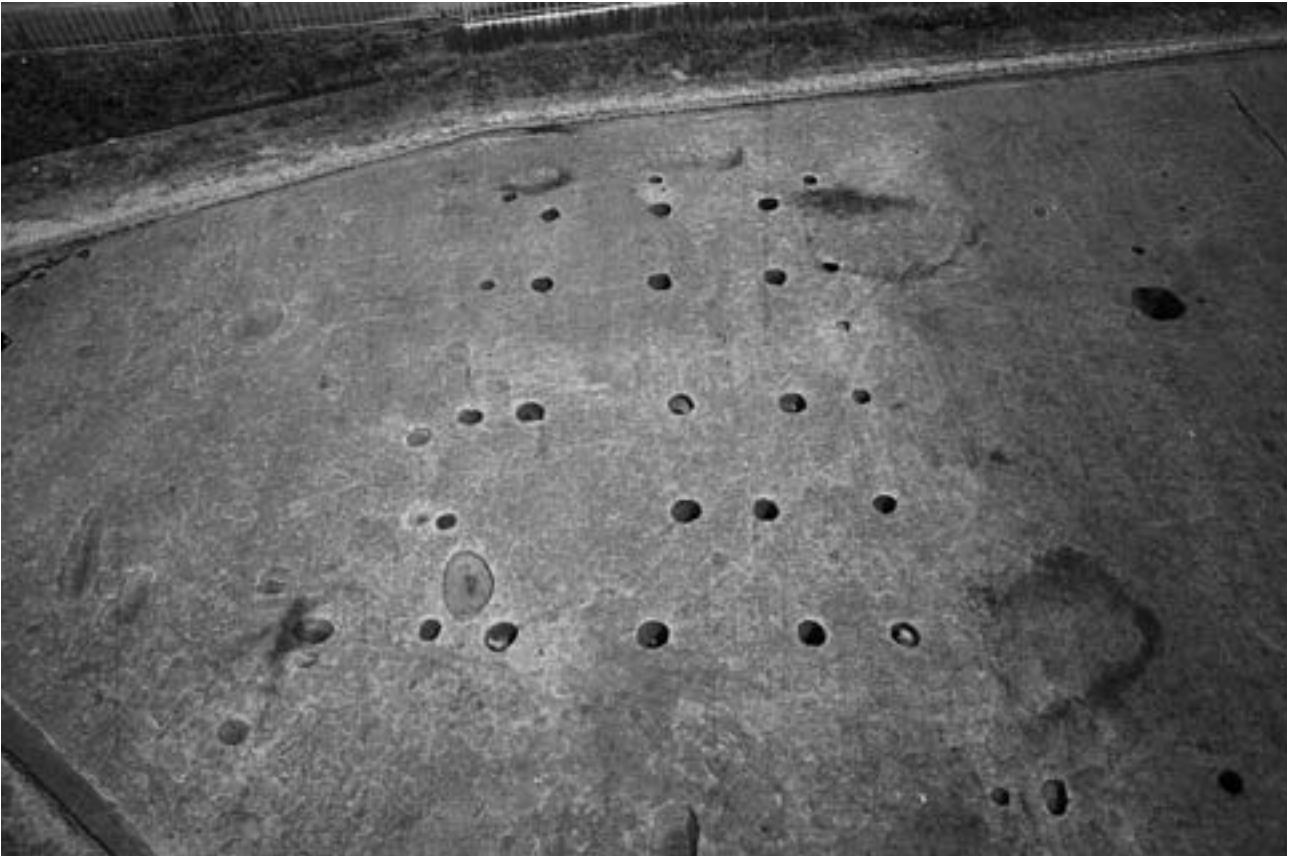
(3) 3区建物跡S B 5305 竈
(西から)



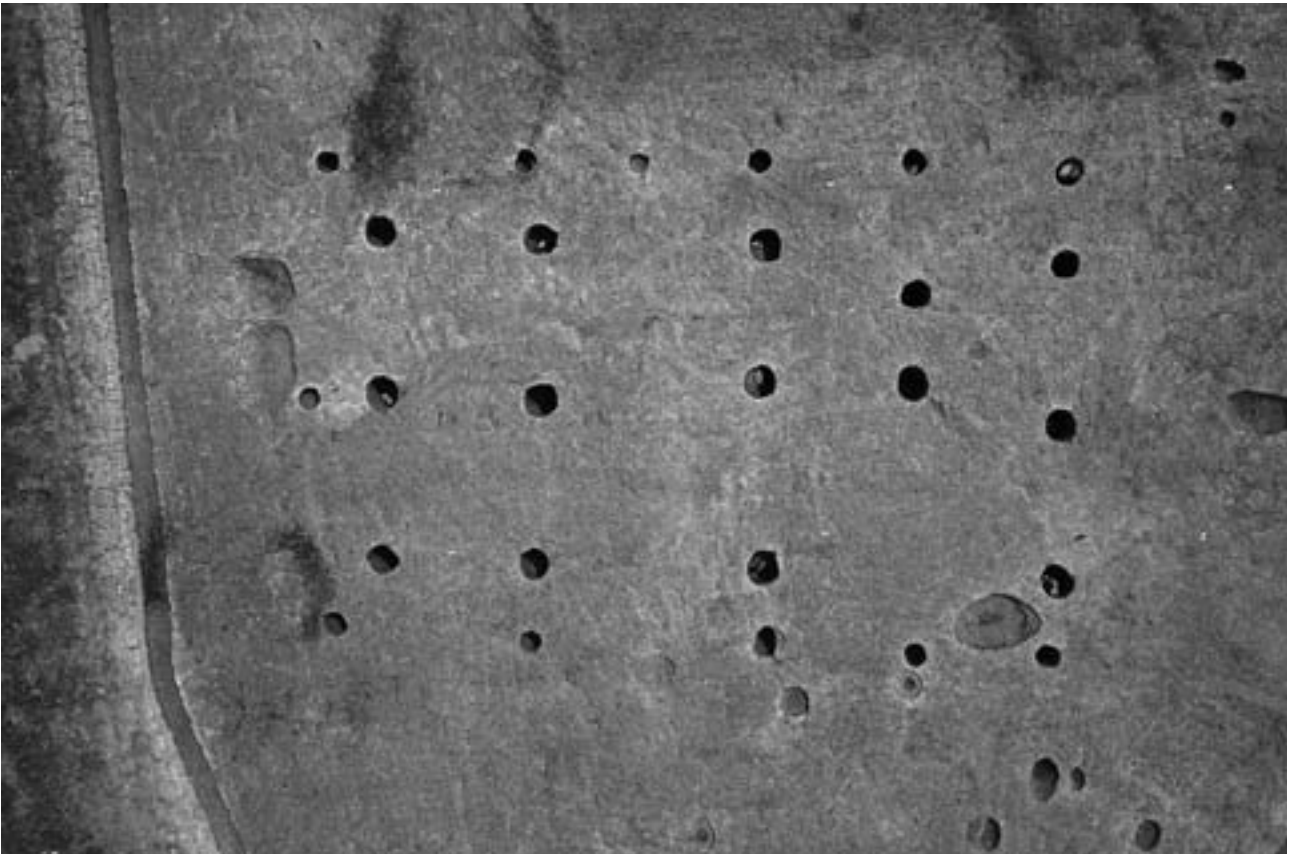
(1) 3区掘立柱建物跡S B 5303 (西から)



(2) 3区掘立柱建物跡S B 5303 (南から)

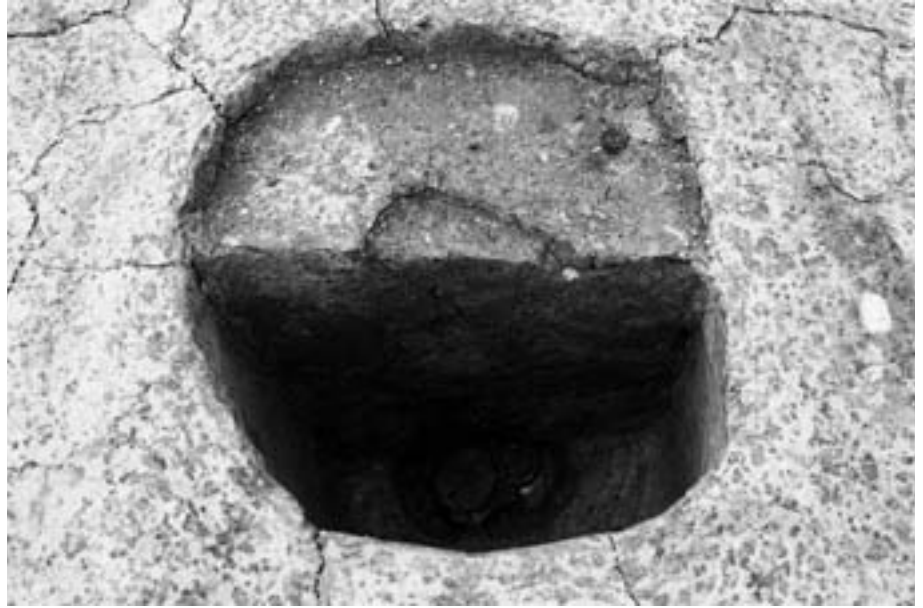


(1) 3区掘立柱建物跡 S B 5303 (南から)



(2) 3区掘立柱建物跡 S B 5303 (上が西)

(1) 掘立柱建物跡 S B 5303
柱穴 P 5 断ち割り (南から)



(2) 同柱穴 P 5 底部土器埋納状況
(北から)



(3) 同柱穴 P 5 土器埋納状況
(北から)





(1) 掘立柱建物跡 S B 5303 柱穴 P 2 (南から)



(2) 同柱穴 P 4 (南から)



(3) 同柱穴 P 6 (南から)



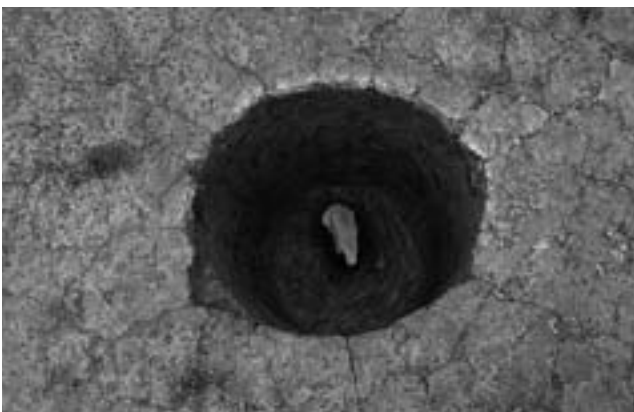
(4) 同柱穴 P 7 (南から)



(5) 同柱穴 P 9 (西から)



(6) 同柱穴 P 12 (南から)



(7) 同柱穴 P 13 (南から)



(8) 同柱穴 P 17 (西から)



(1) 3区溝 S D 53001 (南西から)



(2) 3区溝 S D 53001 (北東から)



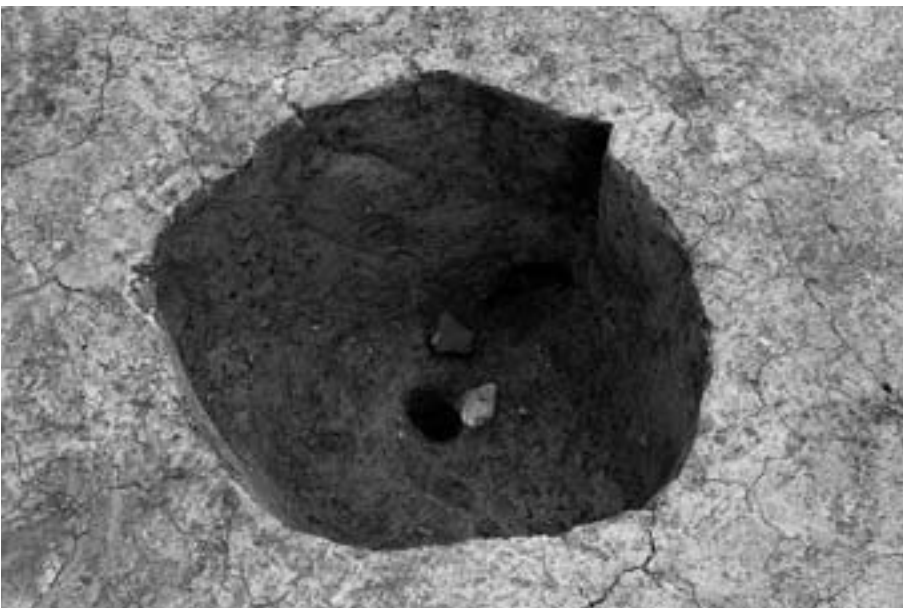
(3) 3区溝 S D 53001 断面
(南西から)



(1) 3区土坑S K 5304 (南から)



(2) 3区土坑S K 5306 (北から)



(3) 3区土坑S K 5309 (北から)



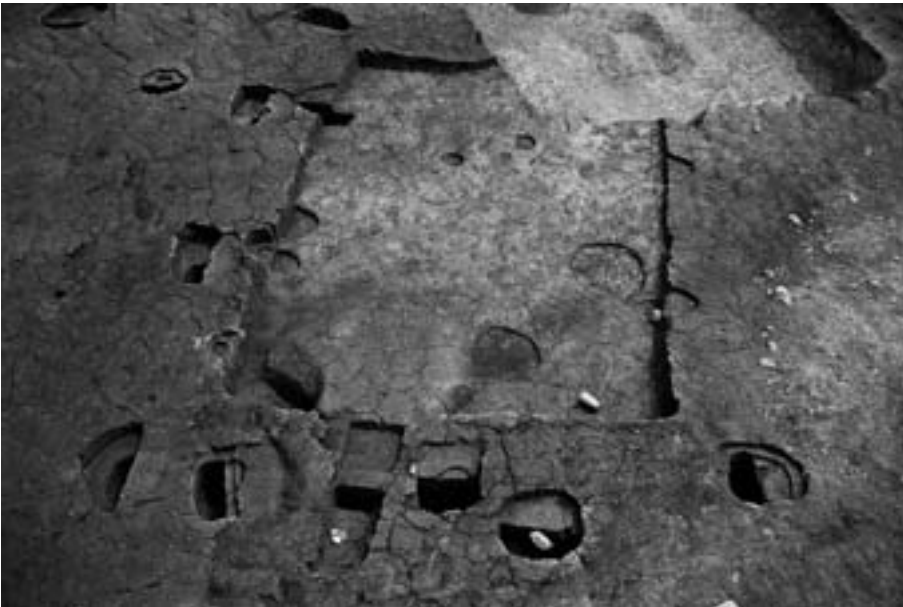
(1) 4区調査地全景（南から）



(2) 4区調査地全景（上が西）



(1) 4区調査地全景（東から）



(2) 4区竪穴式住居跡S H 5401・
掘立柱建物跡S B 5402
（北から）



(3) 4区竪穴式住居跡S H 5401
床面石斧出土状況（南から）



(1) 4区竪穴式住居跡 S H 5401
(南から)



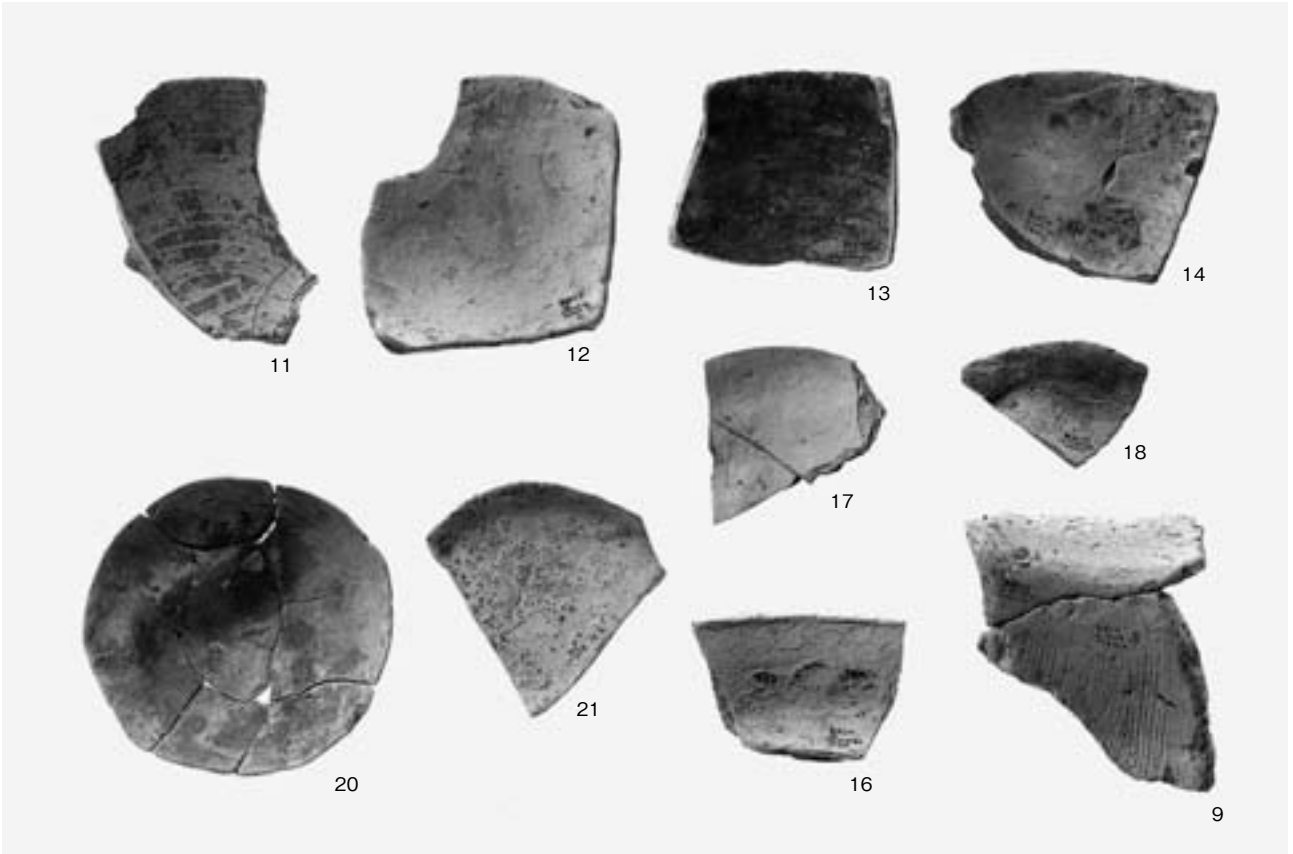
(2) 4区竪穴式住居跡 S H 5401 竈
(南から)



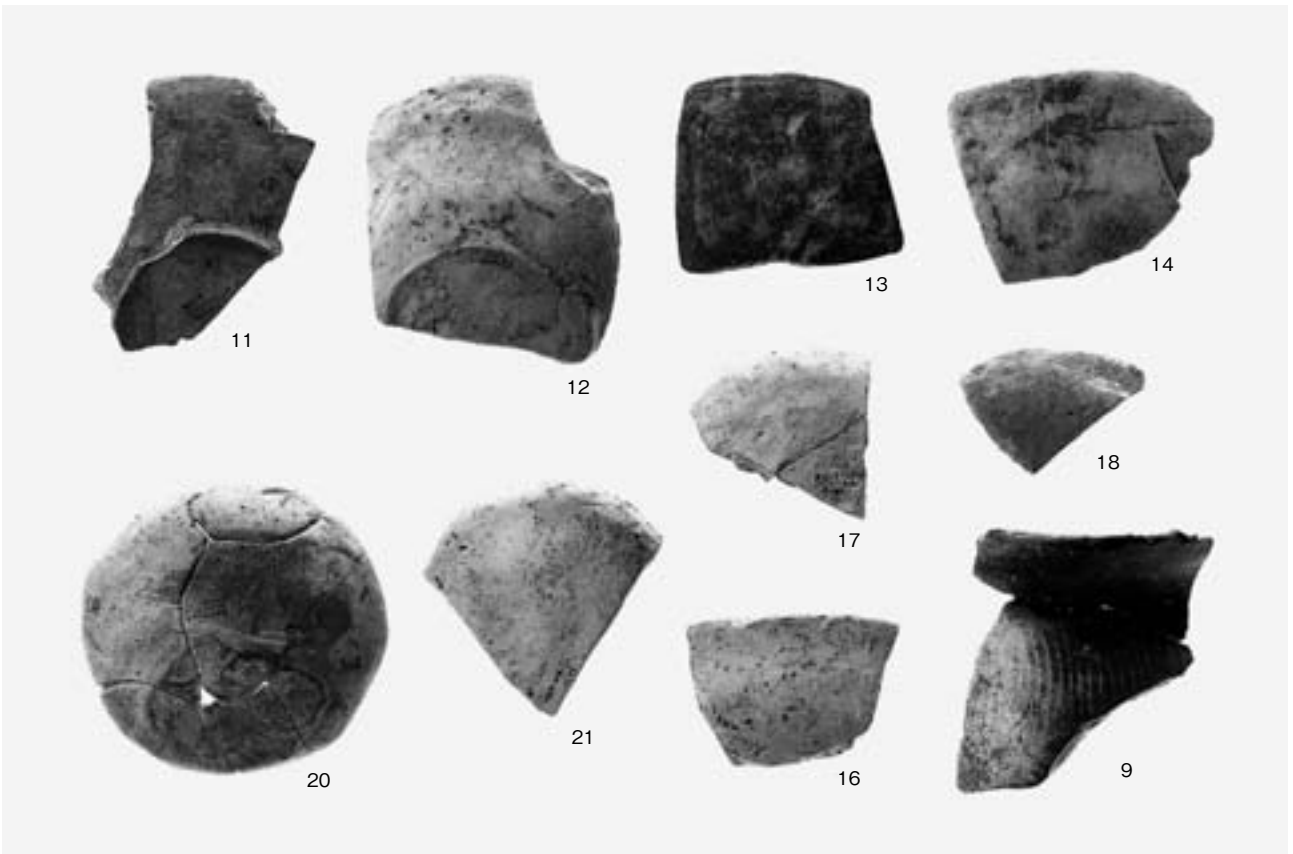
(3) 4区竪穴式住居跡 S H 5401 竈
断ち割り (南から)



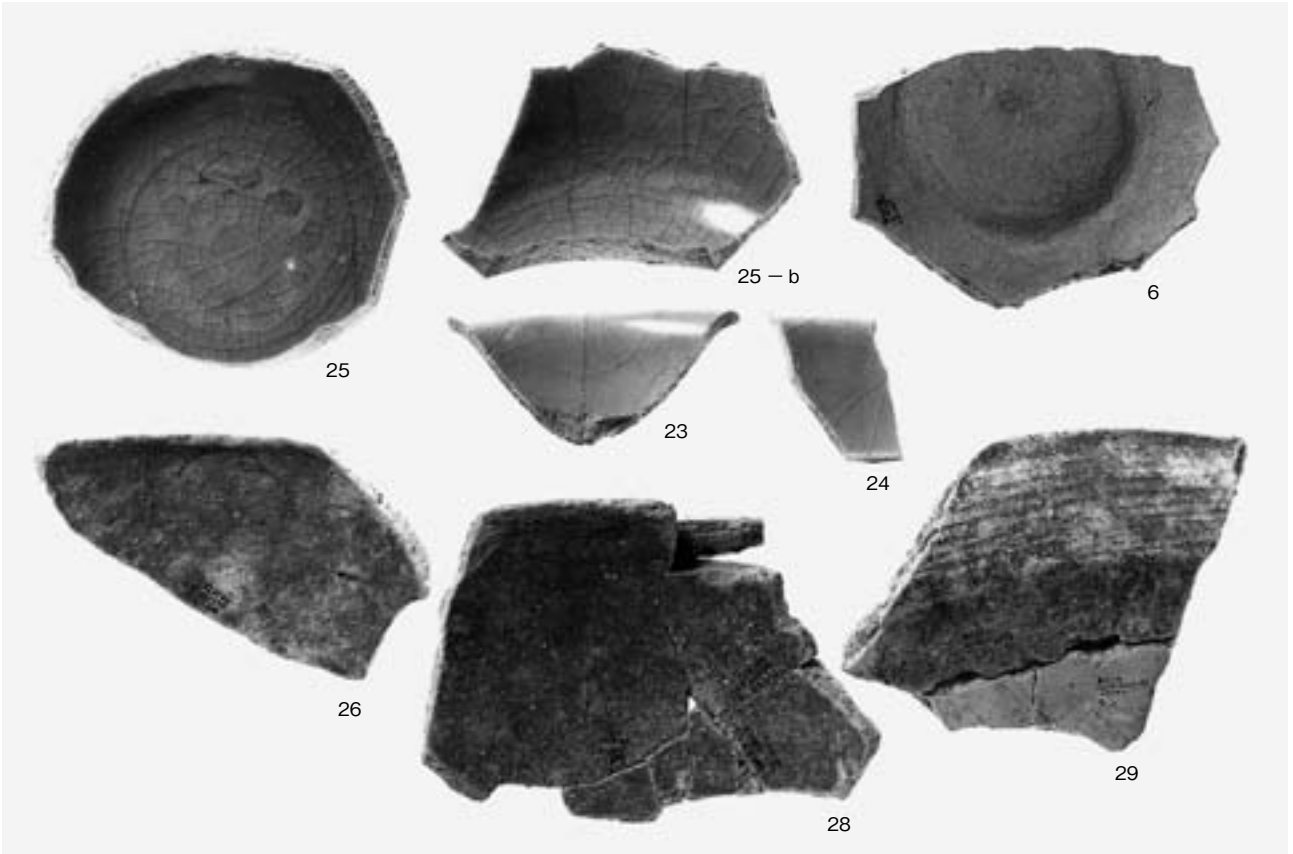
出土遺物 (1)



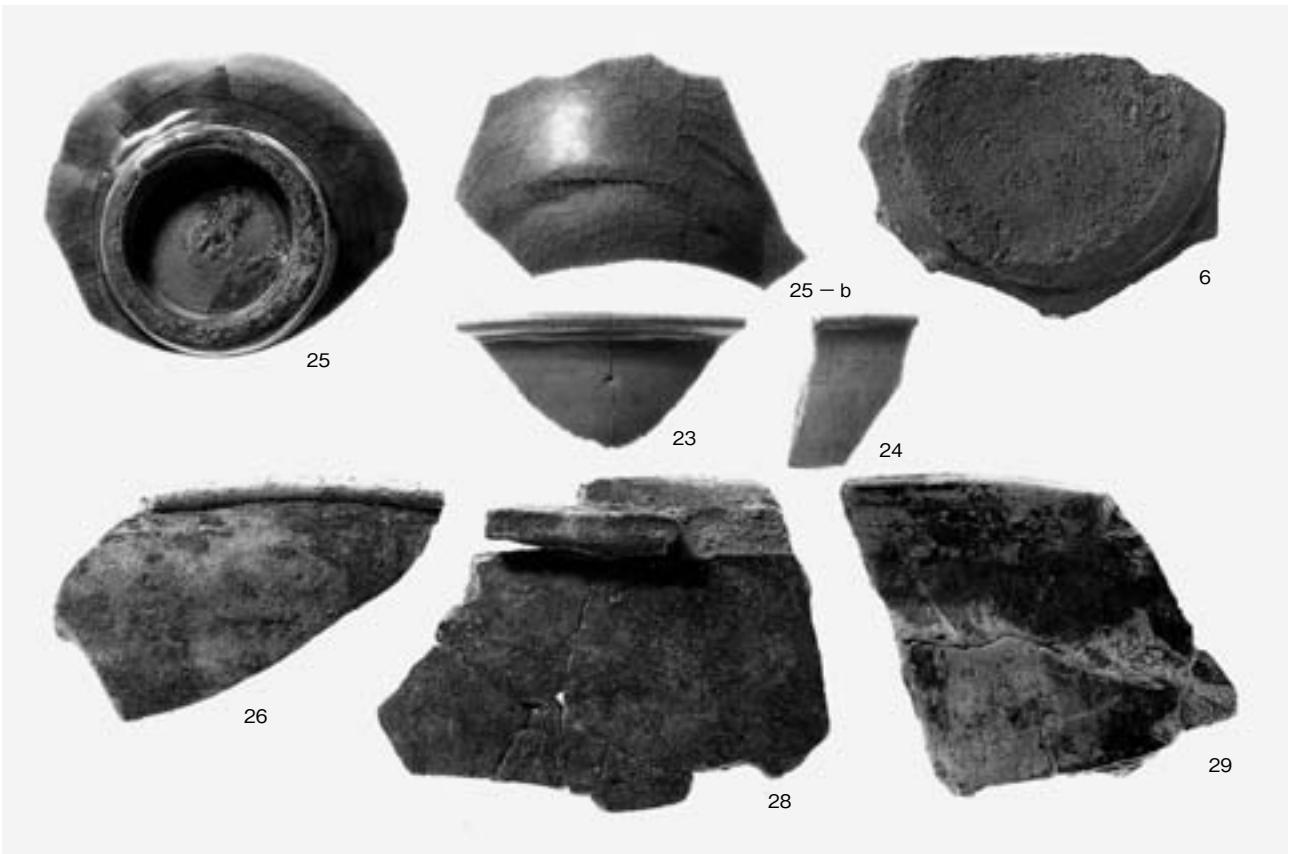
(1) 出土遺物 (2) 内面



(2) 出土遺物 (2) 外面



(1) 出土遺物 (3) 内面



(2) 出土遺物 (3) 外面

| 所収遺跡名 | 要 約 |
|-------------|--|
| 俵野廃寺第2・3次 | 飛鳥時代創建の古代寺院跡で、礫敷き遺構・瓦堆積のほか、寺域東を限るとみられる杭や板で護岸された溝などを確認した。出土遺物から、寺院は平安時代中期に廃絶したと推定される。 |
| 戸田遺跡 | 由良川左岸に近接する12世紀後半に成立した集落遺跡。養和元（1181）年頃までには立荘されていた松尾社領雀部庄関係文書に記された「富田」「とた」の一部にあたと推定される。 |
| 新庄遺跡第5次 | 亀岡盆地北端に位置する縄文～鎌倉時代の複合集落遺跡。古墳～平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、周囲を堀で囲まれた大社造りに復元できる鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。 |
| 長岡京跡左京第527次 | 桂川と小畑川の合流点付近にあたり、中世～近世と推定される溝のほかには、顕著な遺構は検出されなかった。 |

京都府遺跡調査報告集 第132冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141